香川宣阿加点詠草（下）
付、香川景新加点詠草

神作研一

解題

前稿[1]を承けて、本稿にも、元禄期の上方地下歌人香川宣阿（正保四年〈一六四七〉生、享保二〇年〈一七三五〉九月二二日没。八九歳）による添削資料を収載する。影印と翻印、全一七点（すべて岐阜県富加町郷土資料館現蔵）。配列は、先ず年次の判明するもの（一一点）をおき、次いで年次未詳のもの（六点）を並べ、順にF～Vの記号を付した。IとMの本文については既に別稿[2]にて紹介済みだが、ここに宣阿加点の全資料を一覧・掲出させた方が研究上有用だと判断して再録した。

また、富加町郷土資料館には、宣阿息景新（かげちか）（延宝六年〈一六七八〉生、元文四年〈一七三九〉一一月二二日没。六二歳）による加点資料（享保二年七月）がたった一点だけだが所蔵されているので、それをWとして添えた。景新は、父の跡を継いで京都梅月堂二代として名を遺したが、実際の和歌活動はそれほど知られてはいない。宣阿以上にそっけない添削ゆえ、冬音らの歌心を摑めなかった如くであるが、併せてここにその本文を紹介しておきたい。

さて、それら都合一八点の資料の書誌的概要は次の通りである（アルファベット次段（　）内の算用数字は『美濃加治田　平井家文藝資料分類目録』[3]の通し番号）。

F（356）冬音和歌三十首　＊12／21。

＊正徳四年、香川宣阿点（六八歳）。

折紙仮綴一冊。縦一五、三糎×横二七、一糎。楮紙。冬音詠。奥書ナシ。端書「梅月堂宣阿加筆正徳四午年」〔奥ニアリ〕。

G（357）冬音和歌百首　＊12／119／1～5。

＊正徳四年、香川宣阿点（六八歳）。

継紙五通。縦一五、六糎×横七四三、九糎。楮紙（総裏打）。冬音詠。奥書ナシ。端裏「梅月堂加筆正徳四午年」。

H（358）冬音和歌十六首　＊12／172。

＊正徳五年、香川宣阿点（六九歳）。

継紙一通。縦一五、二糎×横一四四、四糎。楮紙。冬音詠。

奥書「合点十首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏「梅月堂加筆正徳五年未」。

I（359）**副雄等和歌三十首**　＊12／93。

＊正徳五年、香川宣阿点（六九歳）。

継紙一通。縦一五、二糎×横二五二、二糎。楮紙。副雄・常観・冬音・仙庵詠。奥書「点十六首／此一巻近来之内／別而御秀逸／珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏「宣阿加筆正徳五未年」。

J（360）**副雄等和歌三十首**　＊12／105。

＊正徳六年春、香川宣阿点（七〇歳）。

継紙一通。縦一五、三糎×横二一六、七糎。楮紙。副雄・仙庵・冬音詠。奥書「合点十九首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏「梅月堂加筆正徳六申春」。

K（361）**仙庵等和歌十六首**　＊12／130。

＊享保元年、香川宣阿点（七〇歳）。

継紙一通。縦一四、九糎×横一六九、二糎。楮紙。仙庵・冬音詠。奥書「合点八首／此巻別而宜敷／珍重〳〵　宣阿（花押）」。端裏「宣阿加筆享保元丙申」。

L（362）**冬音和歌十二首**　＊12／115。

＊享保元年夏、香川宣阿点（七〇歳）。

継紙一通。縦一四、五糎×横一四八、〇糎。楮紙。冬音詠。奥書「合点九首／右何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏「宣阿加筆享保元丙申夏」。

M（363）**冬音和歌二十首**　＊12／99／1。

＊享保元年七月、香川宣阿点（七〇歳）。

継紙一通。縦一四、八糎×横一八六、四糎。楮紙。冬音詠。奥書ナシ。端裏「享保元年申ノ七月日梅月堂加筆」。

N（369）**冬音和歌十首**　＊12／58。

＊享保元年冬、香川宣阿点（七〇歳）。

折紙一通。縦三〇、八糎×横四四、四糎。楮紙。冬音詠。奥書「合点八首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）」。端書「享保元申冬梅月堂吟味」。

O（364）**冬音和歌十首**　＊12／27。

＊享保二年七月、香川宣阿点（七一歳）。

折紙一通。縦三三、〇糎×横四五、四糎。楮紙。冬音詠。奥書「合点七首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）」。端書「享保第二丁酉夷則梅月翁宣阿点」。

P（365）**冬音和歌十五首**　＊12／128。

＊享保二年一二月、香川宣阿点（七一歳）。

継紙一通。縦一五、五糎×横一三二、九糎。楮紙。冬音詠。奥書「合点十一首／何も面白／珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏「丁酉臘宣阿点」。

Q（366）**冬音和歌二十一首**　＊12／90。

＊年次未詳、香川宣阿点。

継紙一通。縦一五、四糎×横一五八、五糎。楮紙。冬音詠。奥書「合点十五首／何も面白御詠共／御工夫御升進／大ニ珍

重〳〵／宣阿（花押）」。端裏「〔上部破レ〕宣阿点」。巻首上部少破レ。

R（367）**冬音和歌十二首**　＊12／13。

＊年次未詳、香川宣阿点。

折紙一通。縦三一、三糎×横四三、二糎。楮紙。冬音詠。奥書「愚点十首／何も面白風体好／珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏ナシ。

S（368）**冬音和歌十首**　＊12／14。

＊年次未詳、香川宣阿点。

折紙一通。縦三一、二糎×横四三、三糎。楮紙。冬音詠。奥書「愚点八首／何も珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏ナシ。

T（370）**冬音和歌十首**　＊12／326。

＊年次未詳、香川宣阿点。

折紙一通。縦三一、二糎×横四三、二糎。楮紙。冬音詠。奥書「八点／何も別而珍重〳〵　宣阿（花押）」。端裏ナシ。

U（371）**冬音和歌二首**　＊12／18。

＊年次未詳、香川宣阿点。

切紙一通。縦一六、三糎×横二三、四糎。奉書紙。冬音詠。奥書「皆之／何も珍重〳〵　宣阿」。端裏ナシ。

V（372）**冬音・仙庵和歌十三首**　＊12／165。

＊年次未詳、香川宣阿点。

継紙一通。縦一五、四糎×横一三六、五糎。楮紙。冬音・仙庵詠。奥書「合点十二首／何も面白別而将又／六かしき題御秀逸／珍重〳〵／宣阿（花押）」。端裏、前欠（破レ）ゆえ不明。前欠〔破レ〕。

W（373）**冬音和歌十首**　＊12／12。

＊享保二年七月、香川景新点（四〇歳）。

継紙一通。縦三〇、八糎×横四四、四糎。楮紙。冬音詠。奥書ナシ。端書「享保二酉夷則景新加筆」〔奥ニアリ〕。

なお、翻印にあたっては、これまでの方針をおおむね踏襲した。詳細は次掲「凡例」につかれたく、また適宜影印を参照願いたい。

注

（1）拙稿「香川宣阿加点詠草（上）」（本誌五巻二号、二〇〇九・三）。

（2）拙稿「元禄期歌人の添削資料」（本誌一巻一・二合併号、二〇〇五・三）。

（3）加治田文藝資料研究会編、富加町教育委員会発行、二〇〇五刊。

〔付記〕所蔵資料の紹介を許された富加町郷土資料館に篤く御礼を申し上げる。

（かんさく・けんいち　本学文学部教授）

凡例

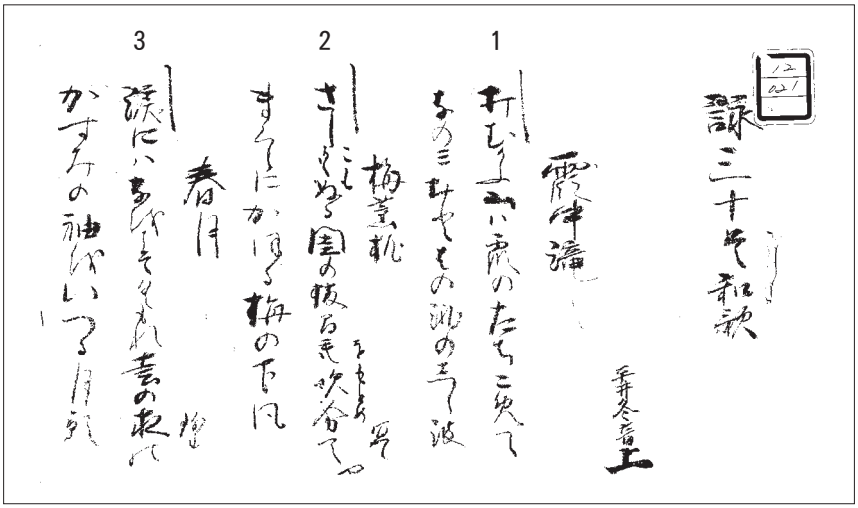
一、影印にあたっては適宜縮小し、なお一部に原本の余白を切り継いだところがある（紙面の都合上、折紙も適宜切り継いだ）。
一、影印編・翻印編とも、和歌の頭に通し番号を付した。
一、原歌の次行に、添削後の新しい和歌本文を併記した。
一、評語は〈　〉内にくるんで掲出し、適宜句読点、引用符（「　」）を施した。
一、合点を「○」、長点を「◎」で示した。
一、漢字は、適宜通行の字体に改めた。
一、和歌本文、評語とも、適宜濁点を付した。
一、虫損等による判読不能箇所は、□で示した。
一、誤字や脱字、仮名遣いの誤りについても原本のままとし、適宜（ママ）と注記した。
一、〔　〕内は、神作による注記である。

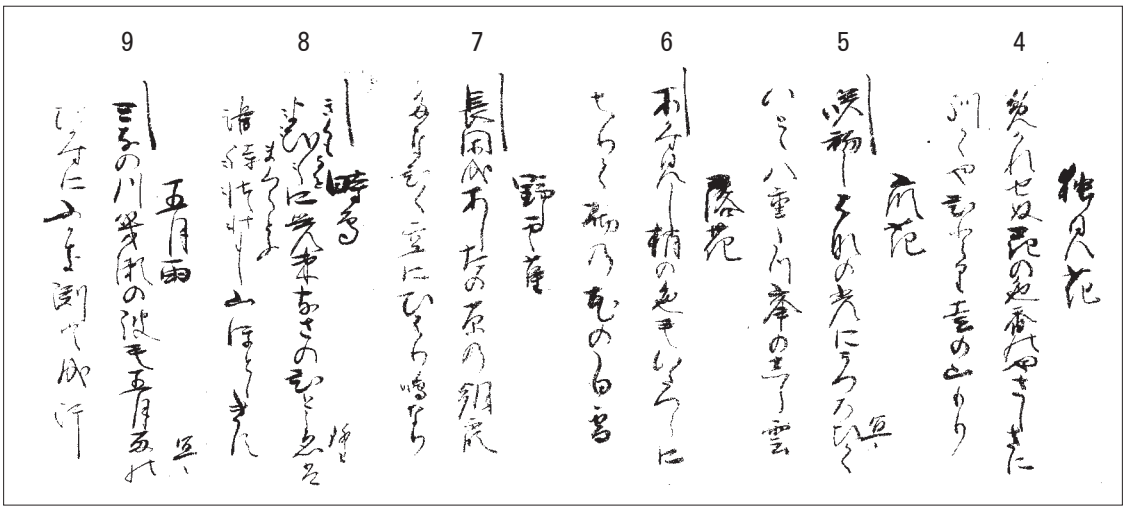
〈影印編〉

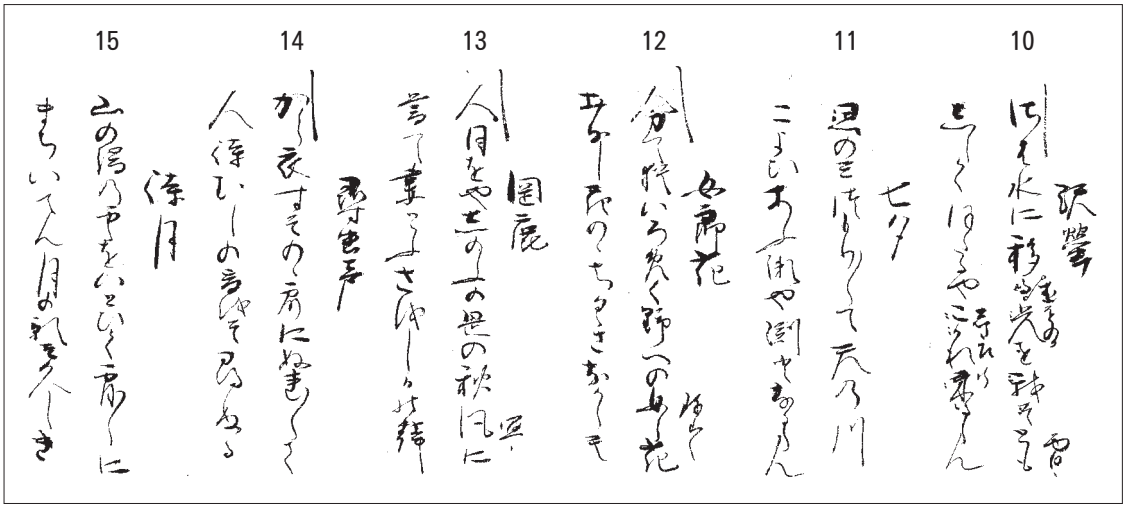
F　冬音和歌三十首

＊正徳四年、香川宣阿点。

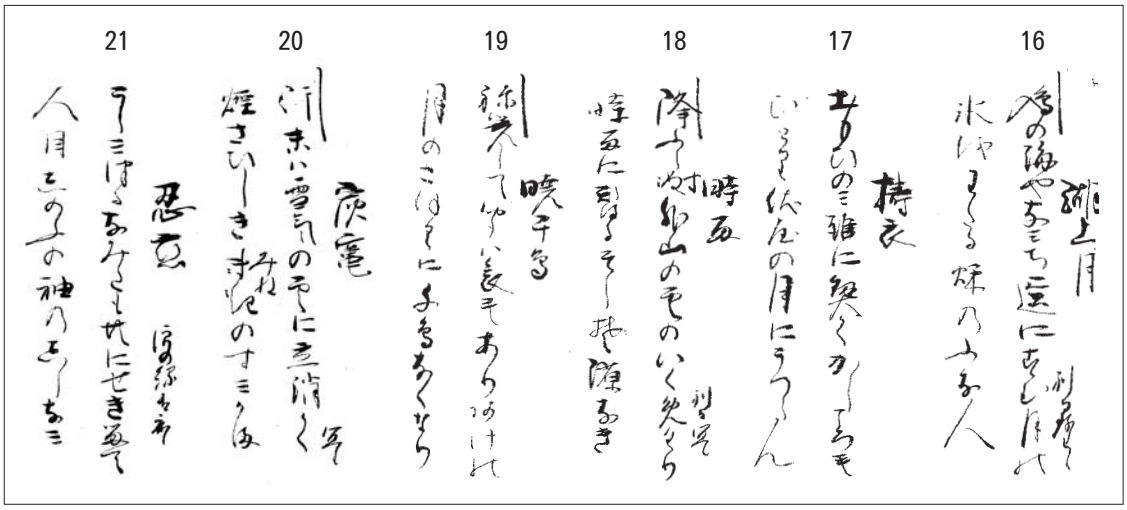
（端書）



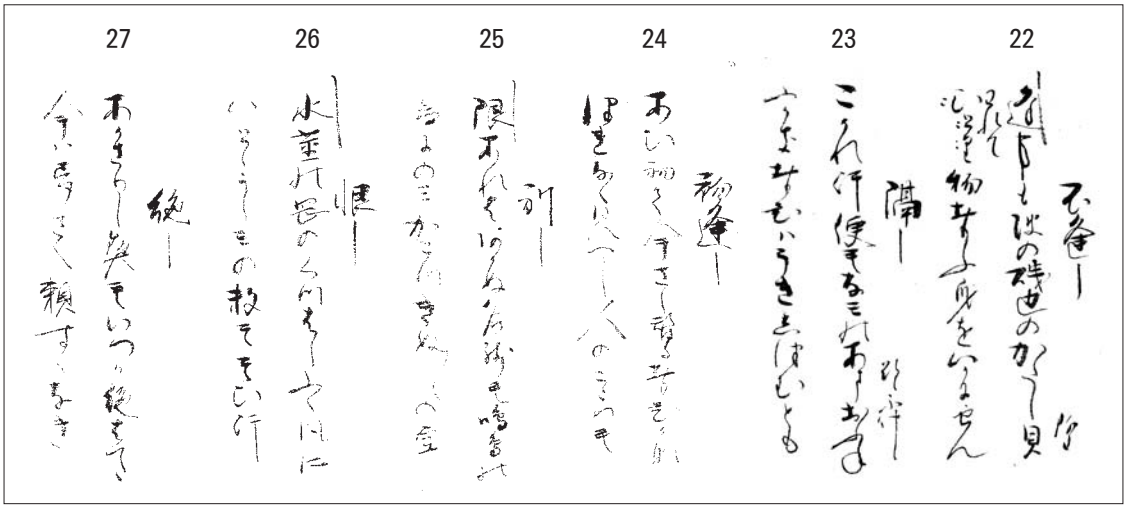




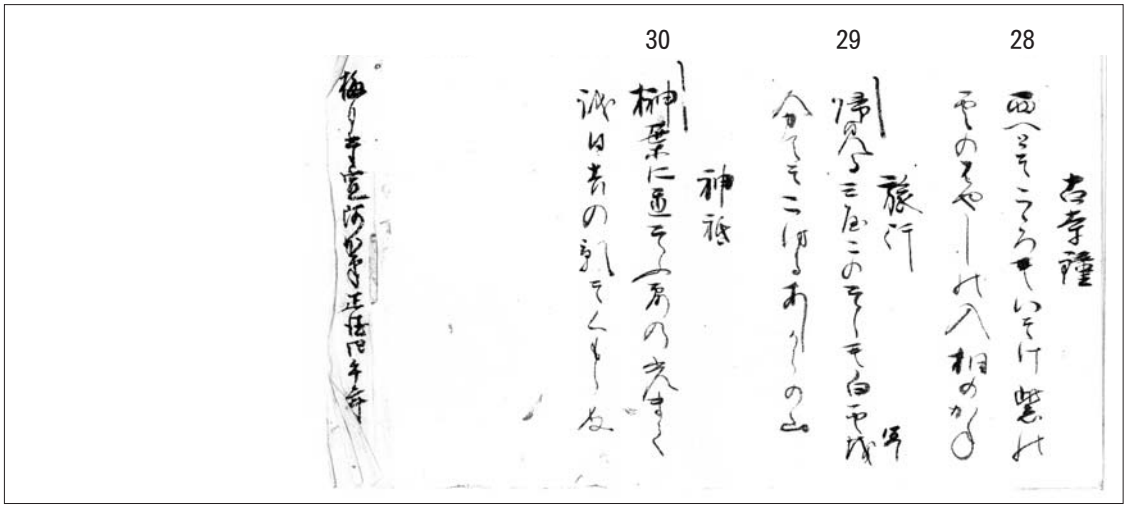
16 17 18 19 20 21



22 23 24 25 26 27



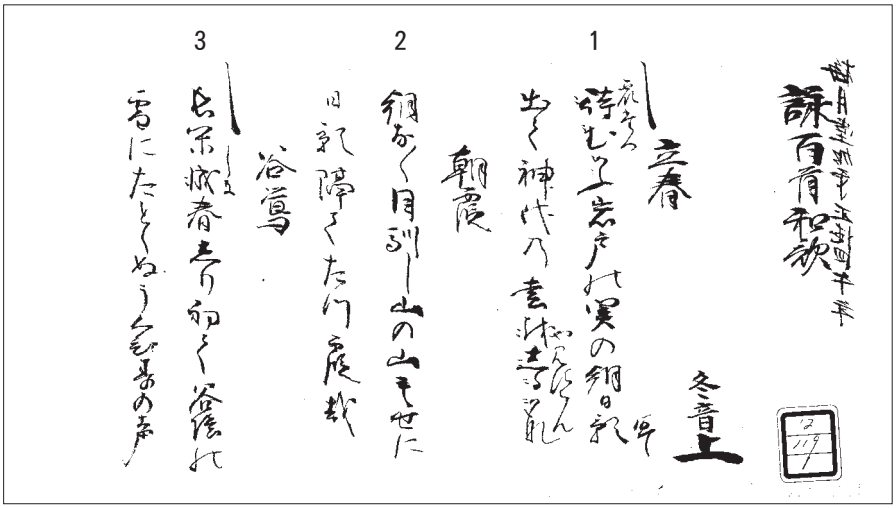
28 29 30



G　冬音和歌百首

＊正徳四年、香川宣阿点。

（端裏）



1　立春

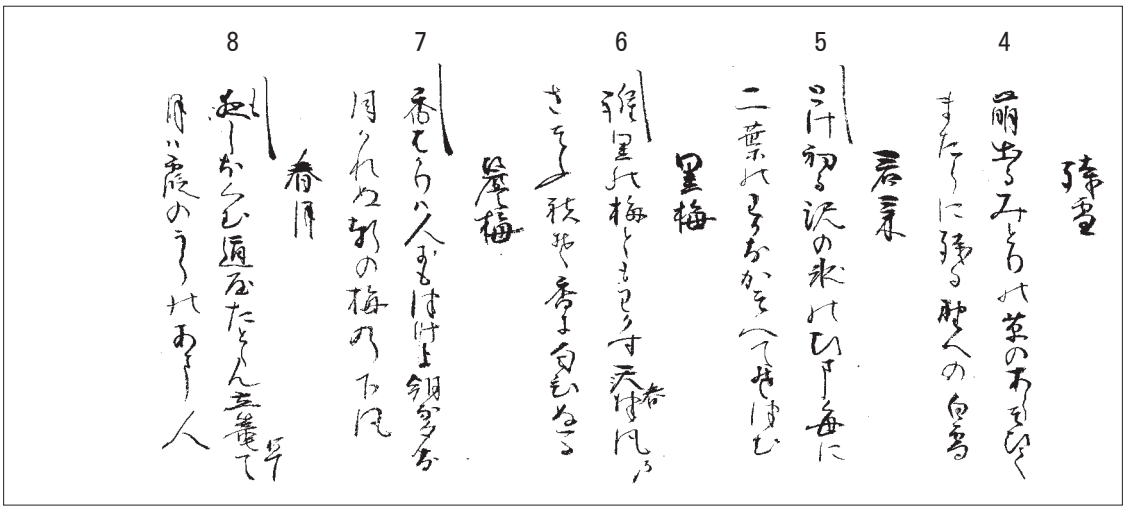
待むかへ　岩戸あけ　異の初日　出く神代の　春はかすみて

2　朝霞

初かすみ　月の入り　山の山もせに　日の入陽さしたり　霞哉

3　谷鶯

長閑　春　初かすみ　谷にはれ　雪にたとへぬ　鶯の声



4　若菜

雪消　つみとられ　菜のあをぬく　まだ〜に　残る野人の　白髪

5　里梅

二葉より　ほかなき　〜てもはじ　初る沢の　水はひ　毎に

6　岸梅

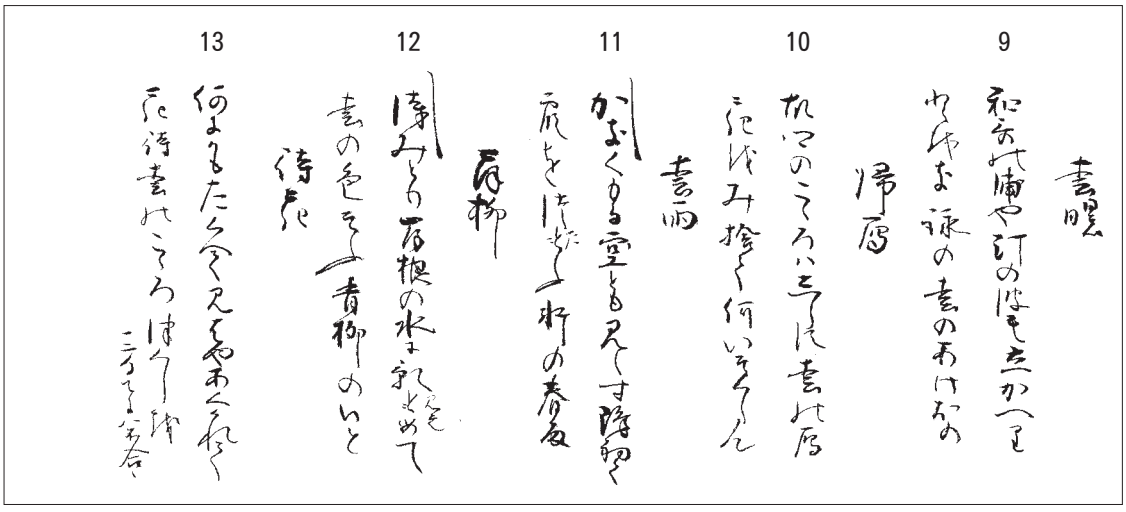
猶里　梅とも　ほ　春　さき　秋　春　白むなる

7　春月

春　人　ほ　月　初　月　梅　下

8　春月

春　遠　たん　春　月　人



9　書屋

和　庵　簡　訂　書　詠　書

10　帰雁

れ　こ　こ　書　雁　書　み　捨　何　人

11　書雨

か　く　る　空　雨　雨　す　降　初　雨　雨　書　雨　雨　雨　雨

12　柳

清　み　石根　水　新　書　色　青柳

13　待花

何　た　く　花　待　花　待　花　こ　こ　花　こ　こ

14 物語

15 見花

16 花盛

17 落花

18 歌人

19 池友

20 三月春

21 更衣

22 仰月

23 待月

24 真

25 移行稀

26 月前

27 月前

28 月前

29 稲川

30 晴て夏なる庭に苔むしや

31 夏草

32 夏月

33 夕立

34 杜蟬

35 夏後

36 早秋

37 七夕

38 二秋風

39 二秋庵

40 夏師匠

41 夕虫

42 夏廉

43 初雁

44 煙夕　宣

かすみて紅葉の色のうすゆきの
けふたちあるぬ煙の夕暮

45 山月

待出山のまにうきてもの
晴てあるしれ山の陰の月

46 師月

咲まさる花の雲も色よりく
風をはらきれ松の和代月

47 海月

月きよく見えぬ玉しはや
月はきよくいはる月乳

48 江月

打寄せ拾ひ名ゆかしいや
むしの月の海人けてをん

49 海月

海はいはれ遠き雲晴く
月は長井の海風を吹

50 蘿蔔

うゆ植一壹ハ吹の風
まるの葉は白しきの蘿蔔　宣

51 持衣

煙の女はすもと副く庵衣
打明すはや高き去はまん

52 暁雪

玉垣の宮の戸開て暁鳥に
初雪の色しきはれ雪

53 思紅葉

旅人の袖もよ入るの乳
さすや作本は思の紅葉も

54 庭紅葉

煙をも紅くちりかく
おしまとも庭のもち

55 九月尽

別れ行秋は人は名月も
名と限るの煙の夕暮　宣

56 加茂

うに煙の高吹人く今朝ちて
名よ高の神の社の松風

57 時雨

ぬれくちす神の乳も雲風に
いくたい今に時雨堂　宣

58 落葉

煙をく庵も河色もの山は
ぬれてやく本の葉落ん

59 朝霜

長閑の春の霜の孫くく笹の葉に
ふるとなく今朝の霜を宝けき

60 宝玉

夕美はうるおう方に長めし碧もへて
春雨ふるる庭の二株桃

61 夕雨

玉川や美濃の月は氣更く
書かく夕雨の戸うもれん

62 水辺

地水の流き思ひ小夜枕
ちくくと響れ伝ひ聞くもの

63 氷加佐

当色る竹のけしのたるり水
よの月を宝み氷加りん

64 秋月

板屋の光いとやかなるも
かさるくも秋夜の月氣

65 庭竹

待ふ月は庭竹の陰を
交の山の月は明まく

66 野霧

草は葉の霧やいとく玉霧
布留野原は原は野のさやけき

67 清雪

小溪の風い雲は高さく
まく清雪は庭の初雪

68 積雪

下枝の竹のよるに降籠て
山と積る雪はあけなの

69 山茶花

林まの夕を正光て降雪ふ
ひこん人やれの下庵

70 蹴雪

春いうよ妹はきと別しも
てつま出き年の雪哉

71 寄月恋

今い月の心はよ待もも
なの色く空は三日月の氣

72 一恋

ちるもの心の寸もかなくり
夏はや降ん八重の浮雲

73 一離

清水ん暁けくよもく
なるやあさは鹿の玉乃佐

74 ―春―

柳はるの空はもゝ百ゝ
秋霧をかすめ初るゝ

75 ―風―

そよかゝる塩屋のまゝ恨人を
はつかまゝき煙風ぞ吹

76 ―山―

こもりて今や心の花ぞ山
このうのまゝ月ぬ思ひ

77 ―雲―

あさ色雲の庭さしも敷けて
はつかの中ハ人目さへん

78 ―海―

和田の原立ちぬ波のうさ
はつもみるゝ八重のしら風

79 ―恋―

思ふ人の神もいとゝすよ
原を別の小路ゝ藤原

80 ―橋―

神代ゝ橋ゝ色も中宮ふ
いはの橋ぞ久ぶ天橋

81 ―本―

ぬれぬ袖も侵蔭の光をは
いはの月ぞ忘ぬ

82 ―京―

生駒色も白もいとはふ
方神宮黒塚の下京

83 ―月―

はつ瀬山中よ山ゝ月
はつ瀬の月ぞ美へく

84 ―生―

和歌おく久かゝ一筋ふ
はつ瀬ぞ敷ぬ生さてふの糸

85 ―鶴―

てゝ鶴さい恨外鶴の庭とふ
はつ瀬ぞ鶴ぞ鶴なけく敷

86 ―玉―

俺ての三今行の多なれや
かさてのぬにうけ玉も

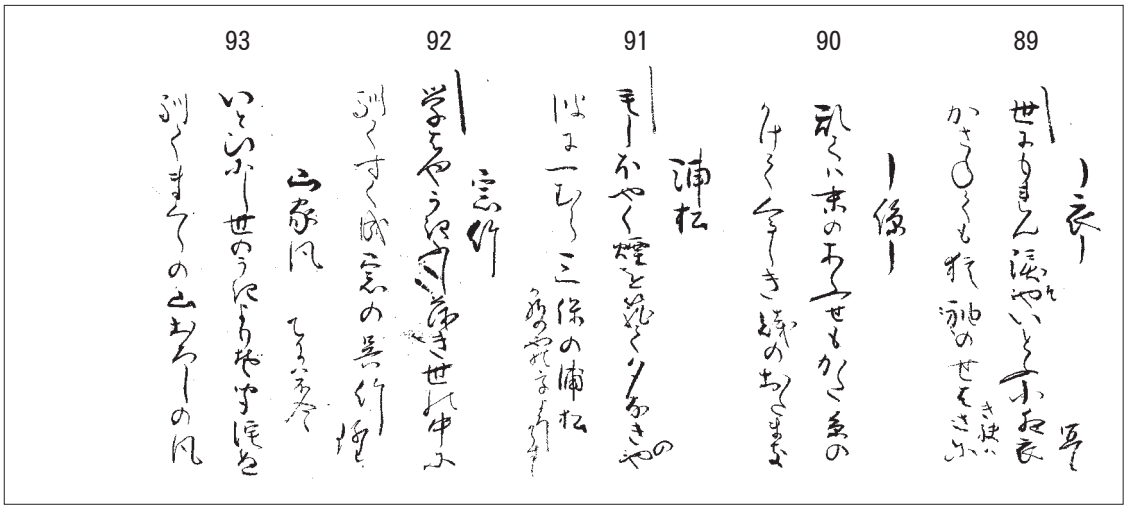
87 ―清―

袖きか玉清の清水とて
むすこうれ庭井あさを

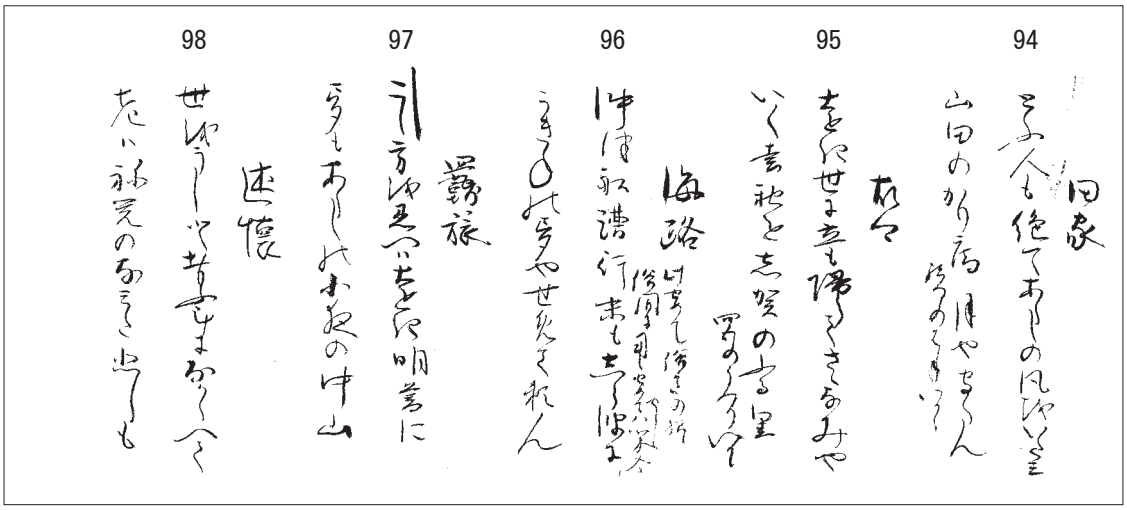
88 ―花―

尺―多ぬ面ぞ中立前く
人ハこすけのまゝ花の

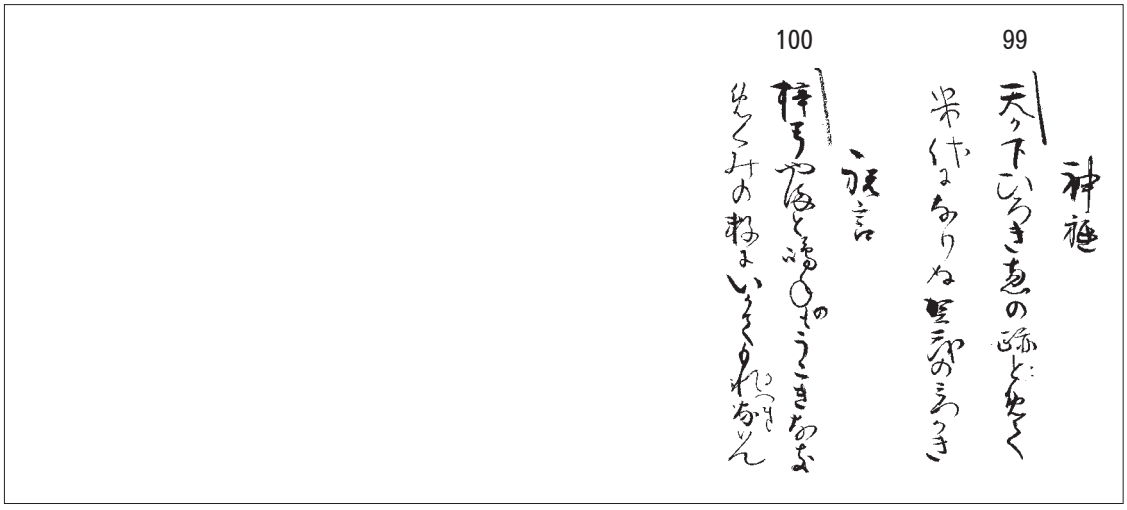
89 90 91 92 93



94 95 96 97 98



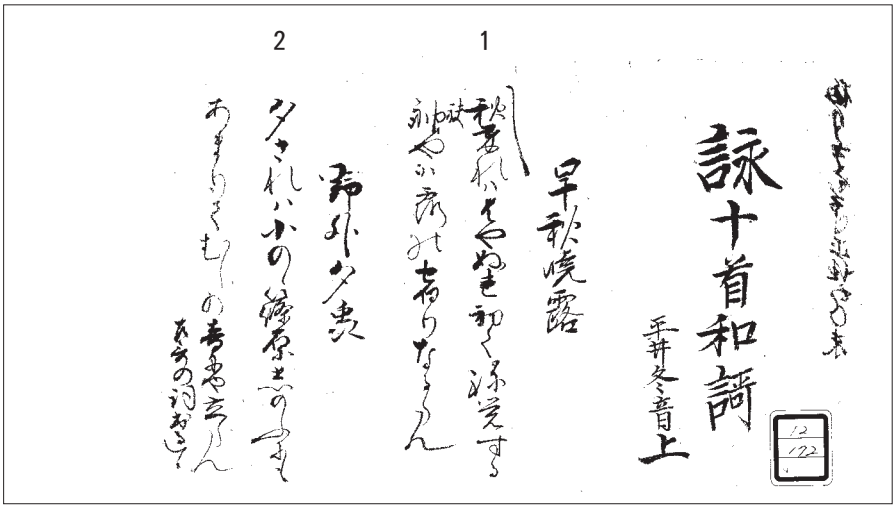
99 100



H　冬音和歌十六首

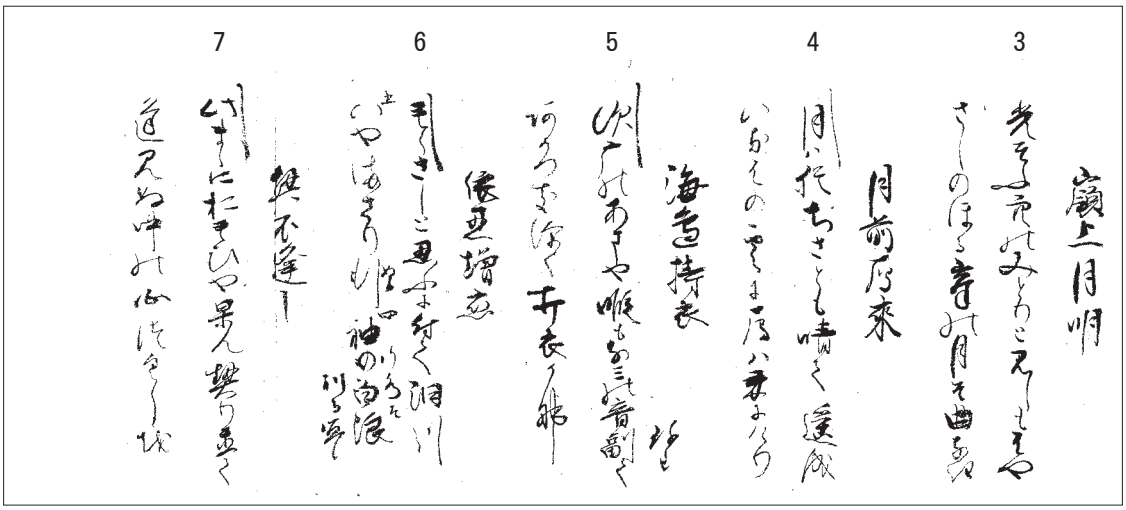
＊正徳五年、香川宣阿点。

（端裏）



1

2



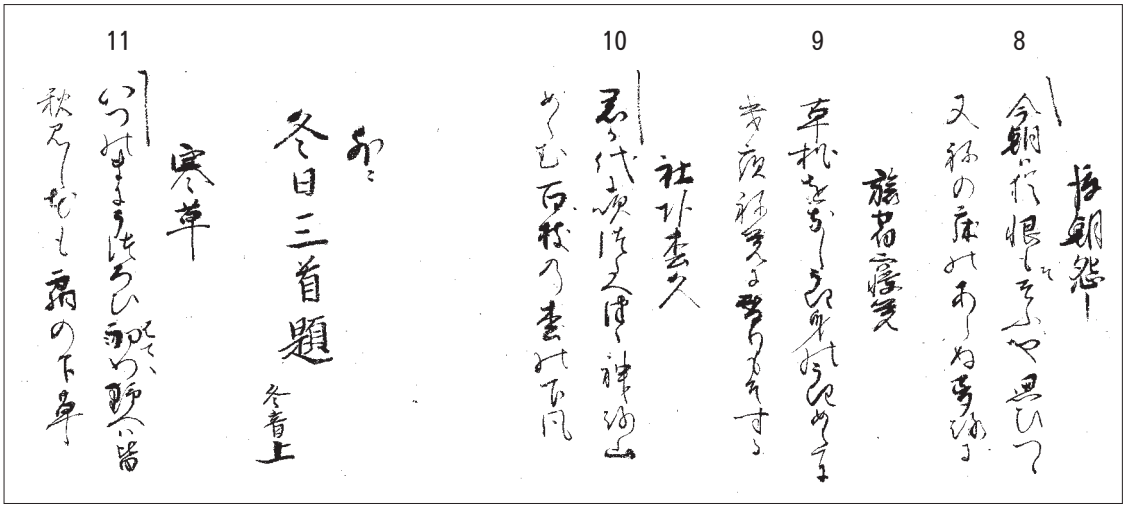
3

4

5

6

7

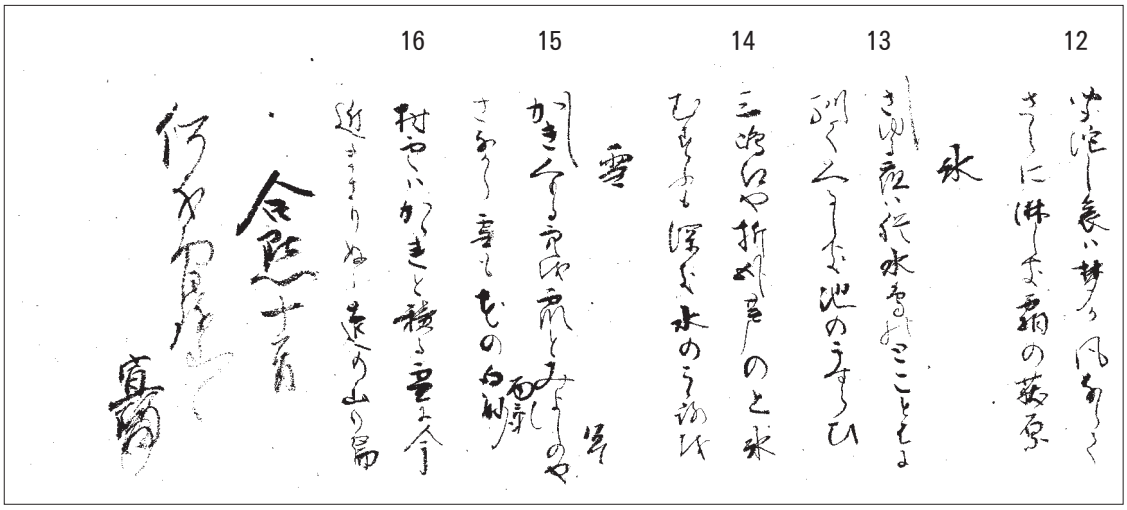


8

9

10

11

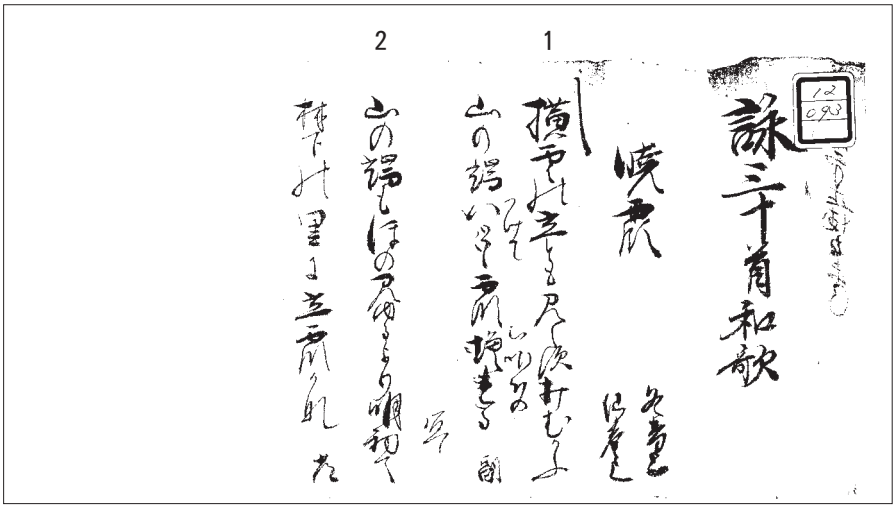


12　13　14　15　16

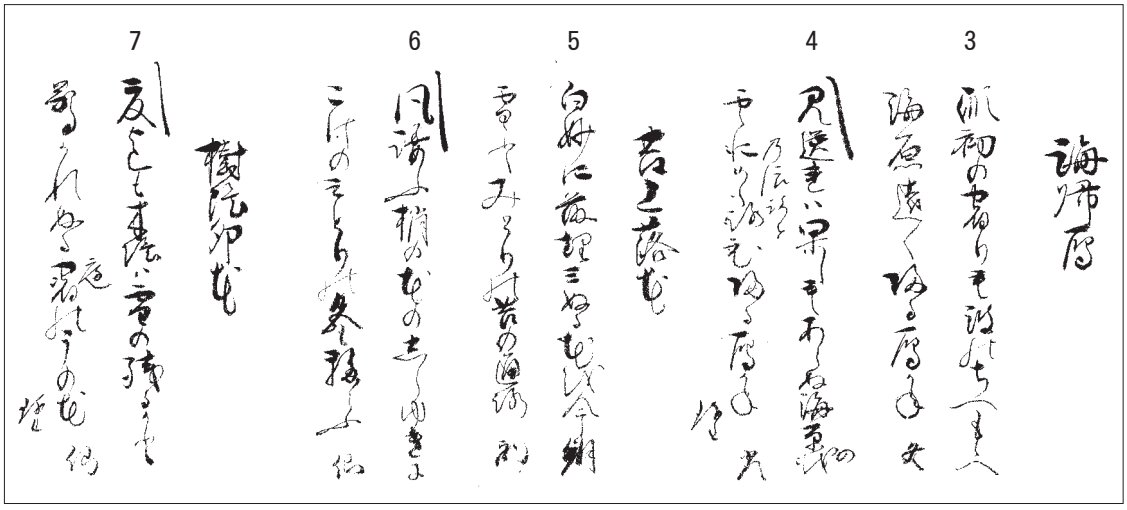
Ⅰ　副雄等和歌三十首

＊正徳五年、香川宣阿点。

（端裏）



1　2



3　4　5　6　7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23　24　25　26　27

28　29　30

J　副雄等和歌三十首

＊正徳六年春、香川宣阿点。

（端裏）

1　2　3

4 雪見花

5

6

7 郭公

8

9

10 深草宿

11

12

13 海辺月

14

15

16 山紅葉

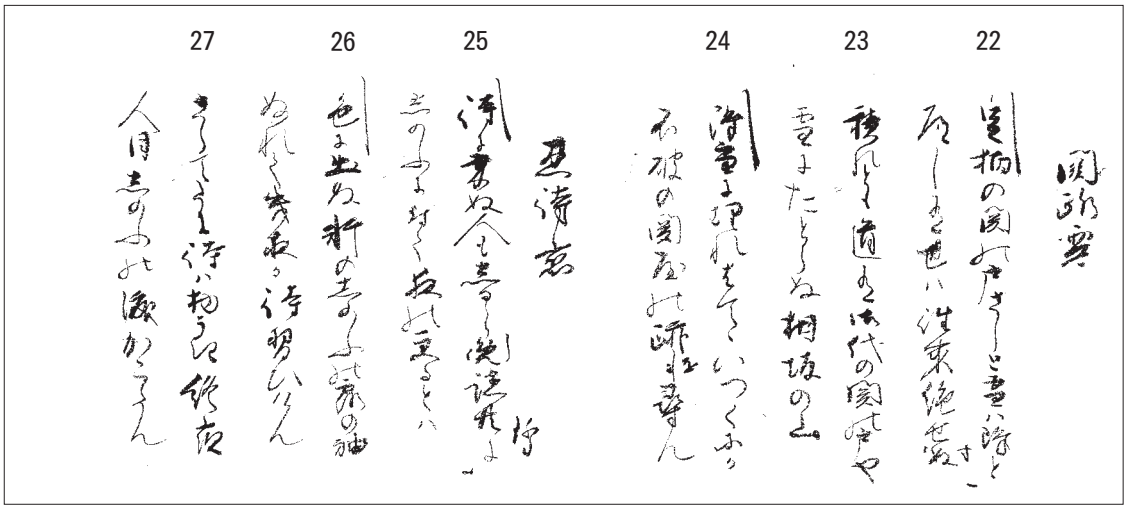
17

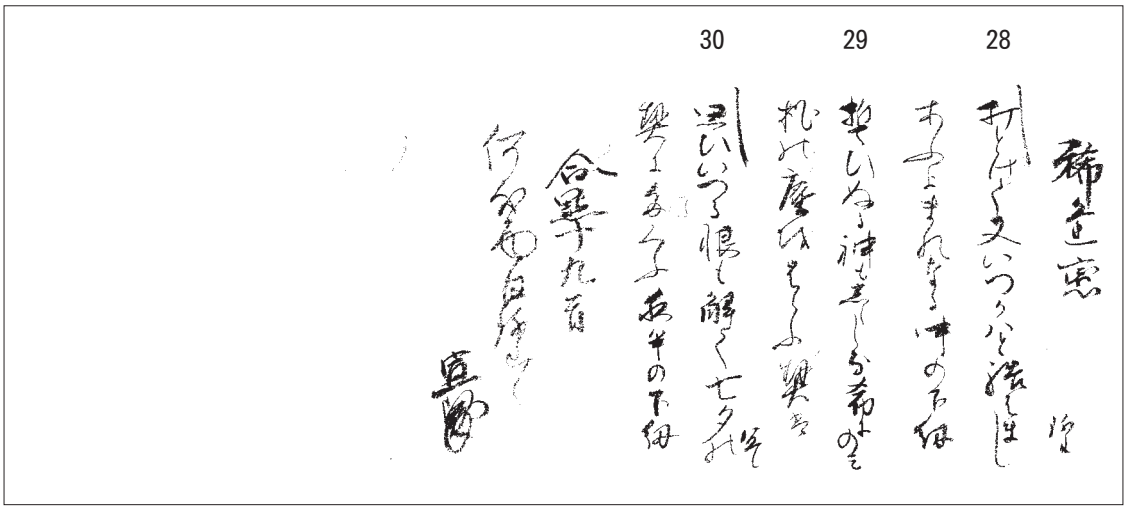
18

19 朝寒蛙

20

21





K　仙庵等和歌十六首

＊享保元年、香川宣阿点。

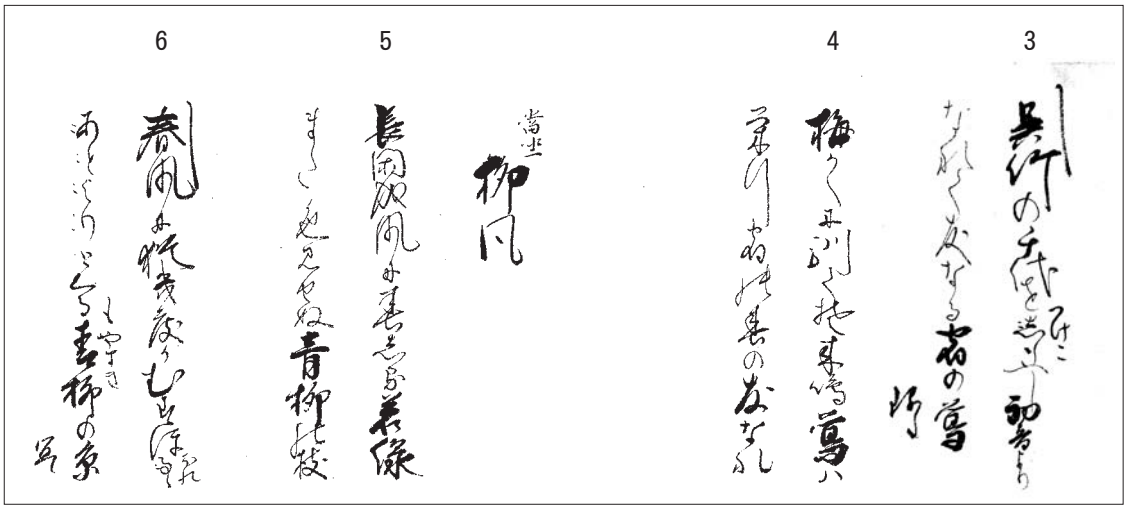
（端裏）宣阿等享保元丙申

3

4

5

6

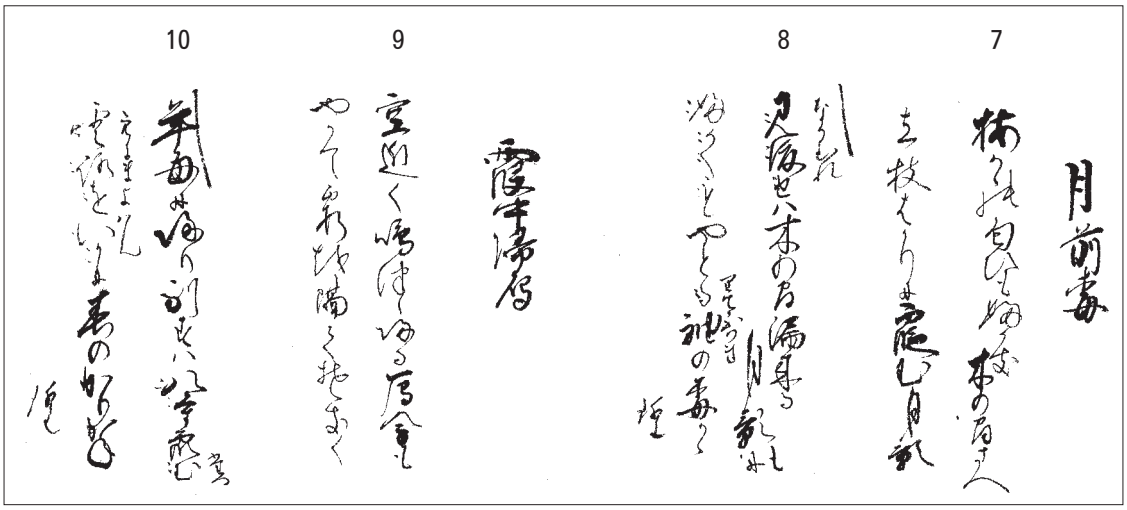


7

8

9

10

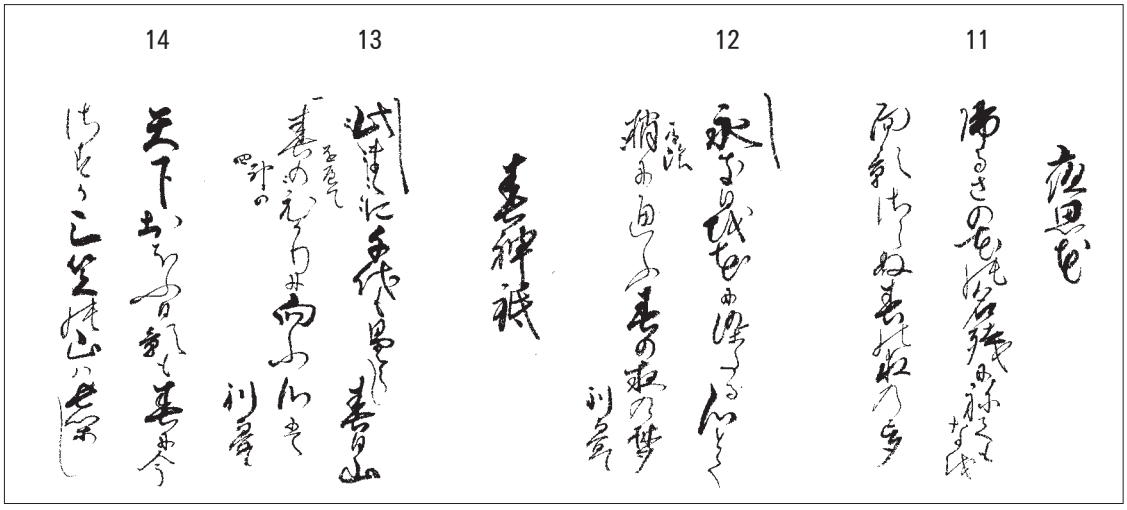


11

12

13

14



三四

15

16

L　冬音和歌十二首

＊享保元年夏、香川宣阿点。

（端裏）　宣阿卿享保元年中夏

詠十二首和謌

1

2

3

4

5

三五

6

山家如歸

7

暮春鶯

8

寄嶽戀

9

春朝

10

春晝

11

春夕

12

春夜

合恋九首

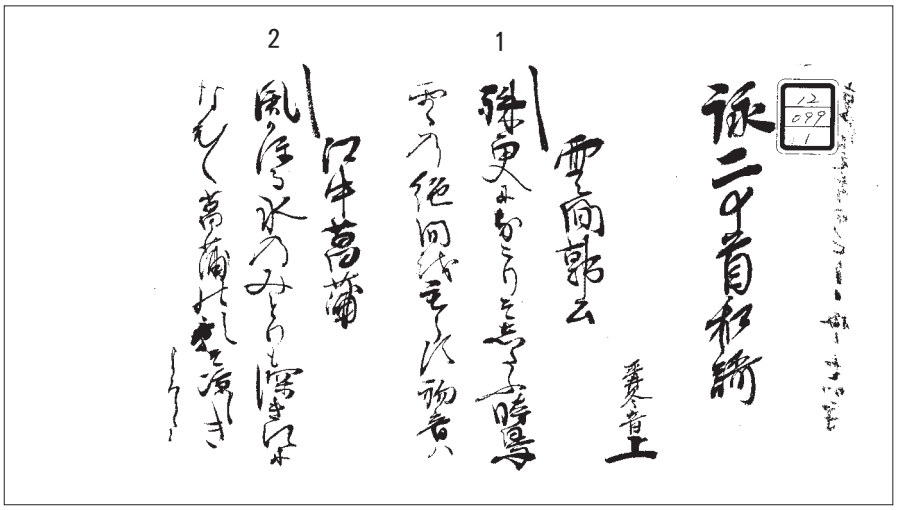
宣阿

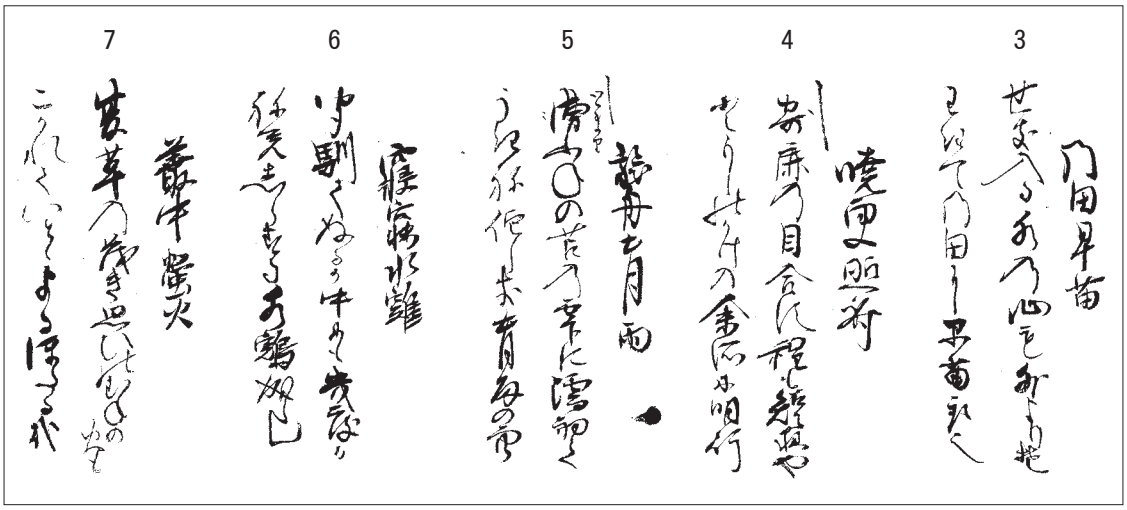
三六

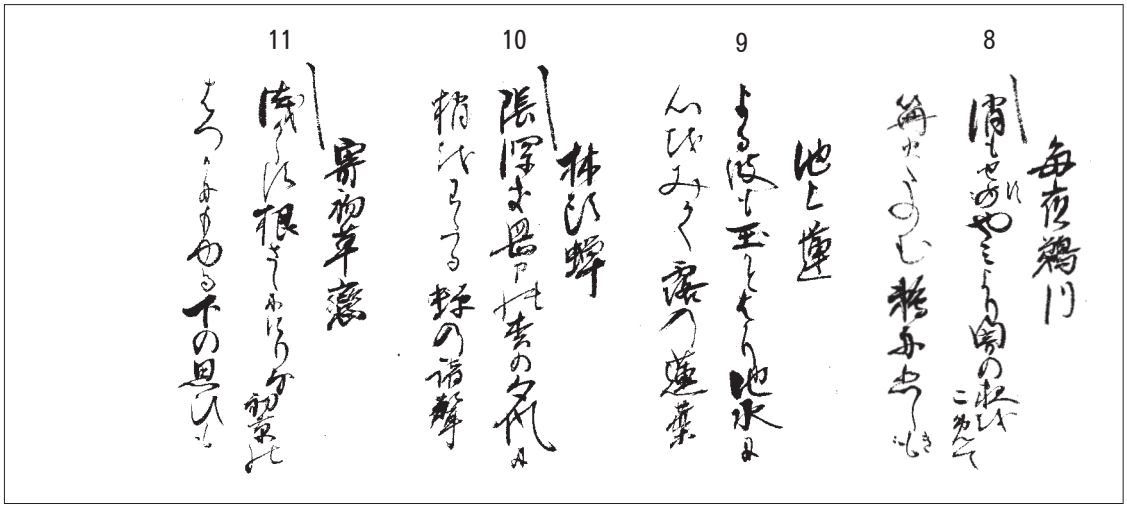
M　冬音和歌二十首

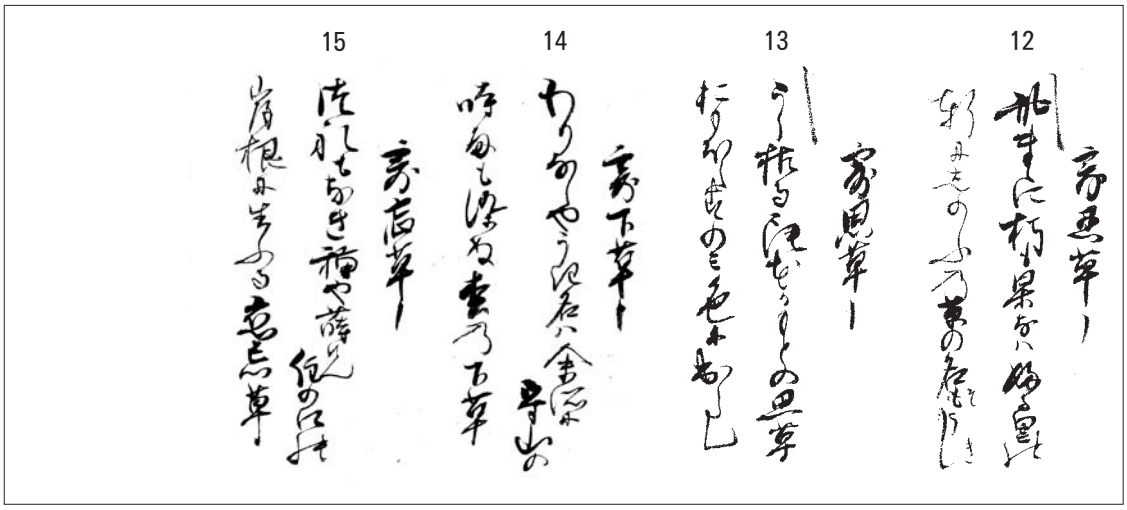
＊享保元年七月、香川宣阿点。

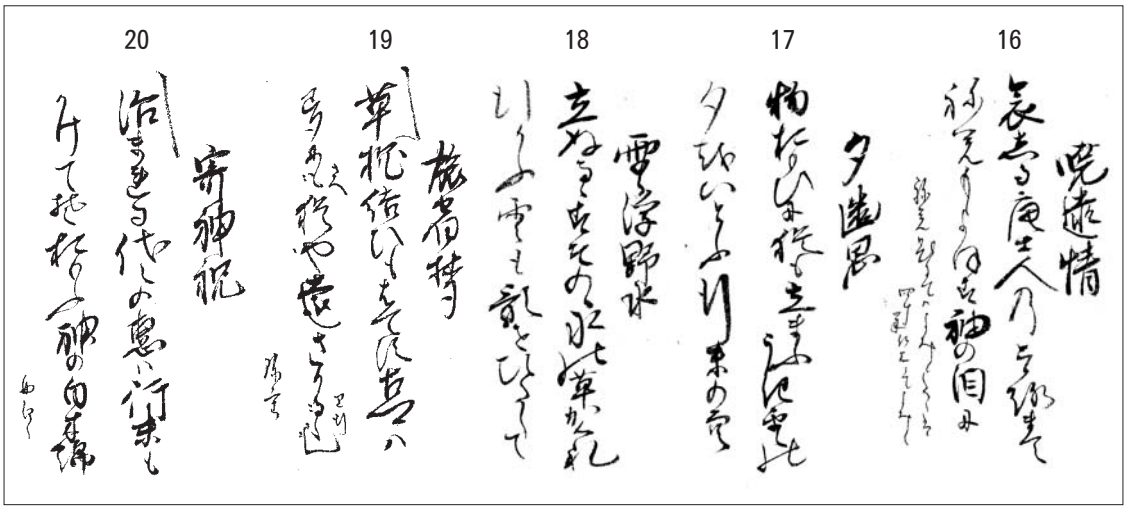
（端裏）享保元年申ノ七月　梅しの会ノ字

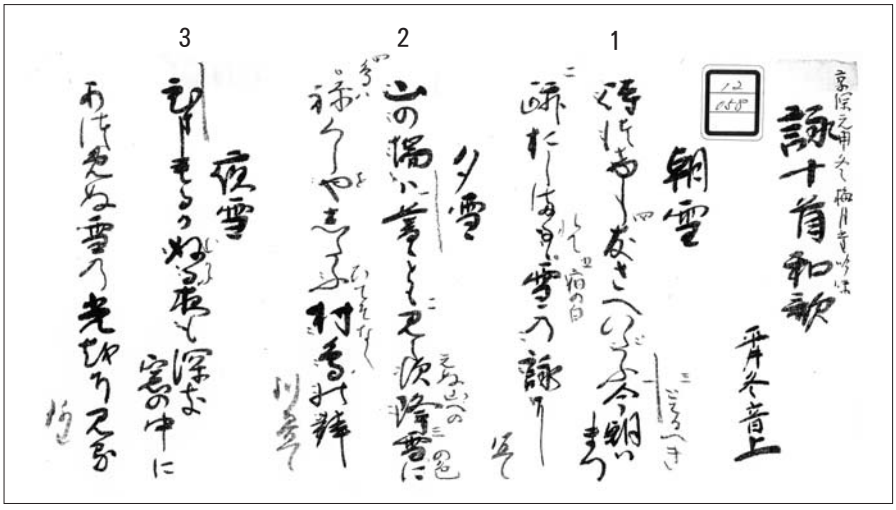










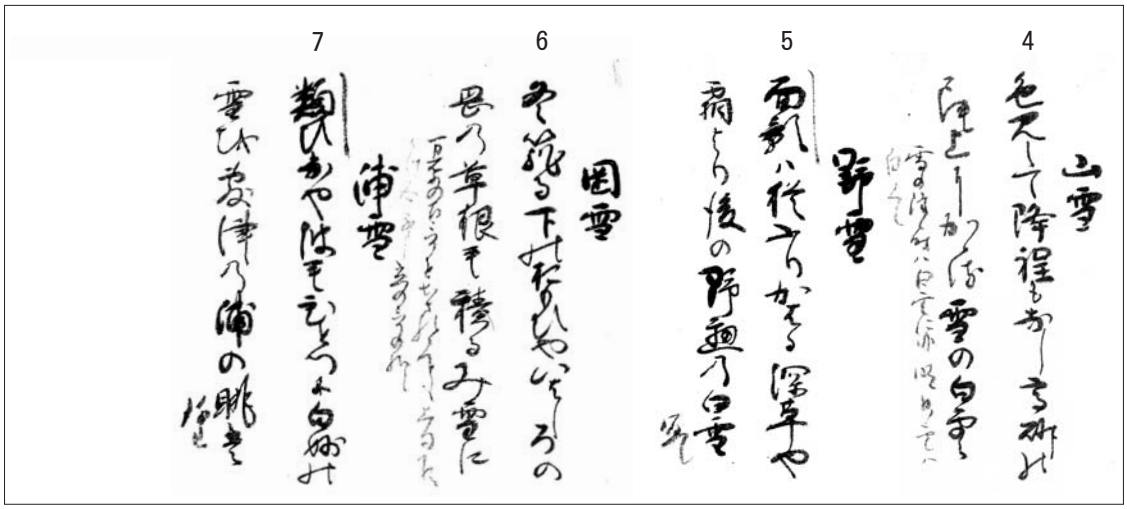


N　冬音和歌十首

＊享保元年冬、香川宣阿点。

（端書）享保元申冬　極月十四日

三八



4 山雪

色そへて降程もあらぬ雪なれど

5 野雪

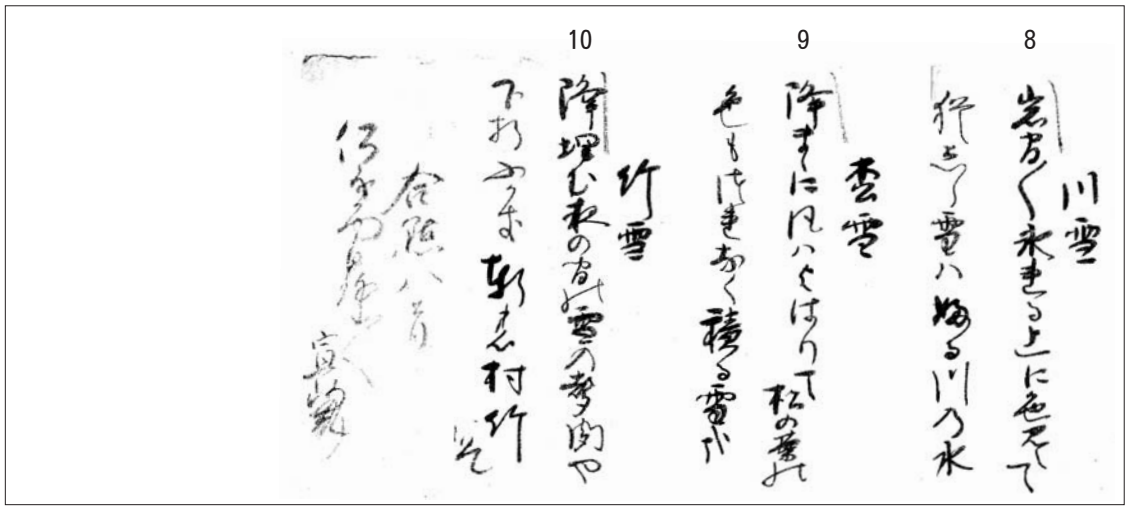
面影は行方のかする深草や

6 田雪

雪解る下はやはらかなるの

7 浦雪

雪ひかぬ海の浦の眺き



8 川雪

岩方く氷まるに色そへて

9 雲雪

降まに風はらはらて松の葉

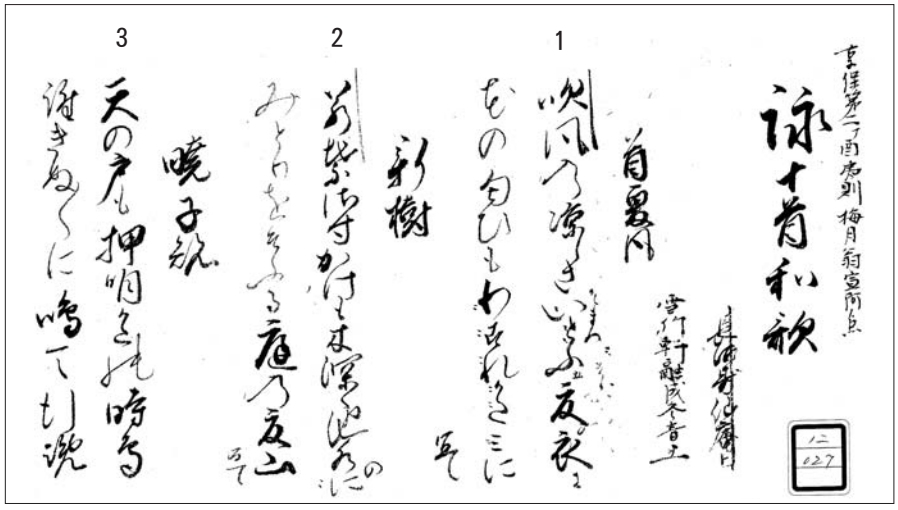
10 竹雪

降埋む根の竹雪の孝の内や

O 冬音和歌十首

＊享保二年七月、香川宣阿点。

（端書）享保第二丙申年梅月菊宣阿点



享保第二丙申年梅月菊宣阿点

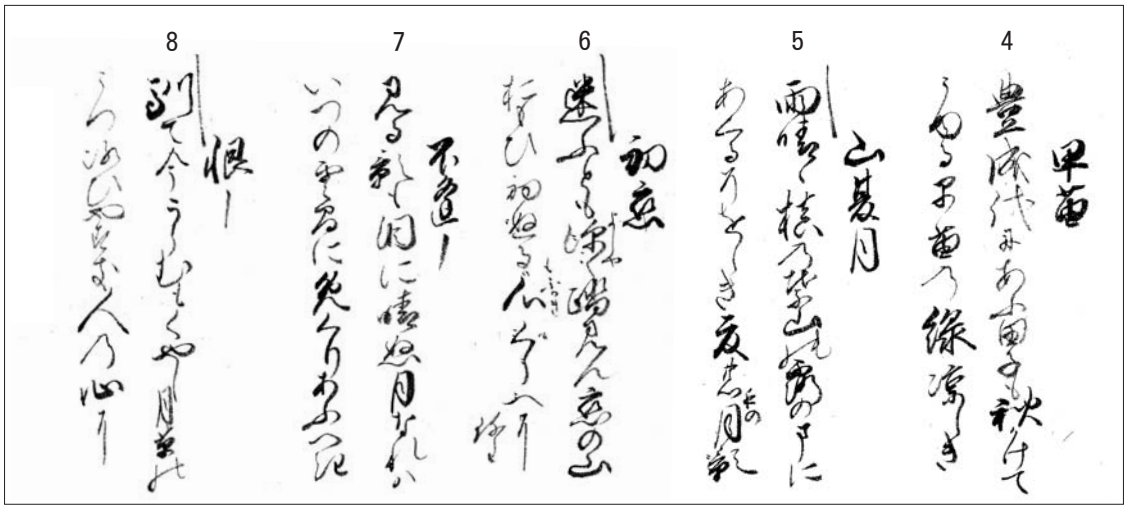
詠十首和歌

1 首夏月

2 新樹

3 暁子規

4



5

6

7

8

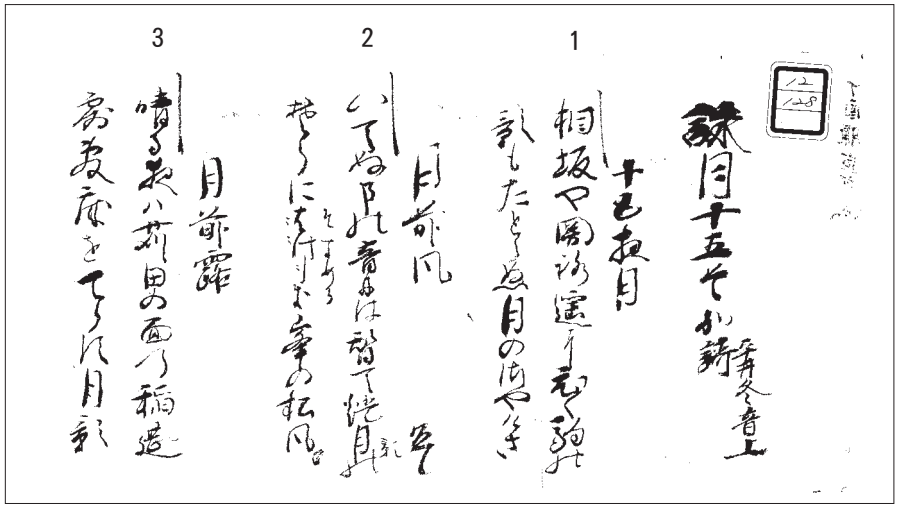
9

10

P　冬音和歌十五首

＊享保二年一二月、香川宣阿点。

（端裏）　「丁酉歌　宣阿点」



四〇

4

山月

富士の根に夕日さすかと見なす
清き月に山風ぞ吹

5

野月

秋の色や色深き香に香深き
むしの声なる野の月哉

6

浦月

吉田浦の海人遠く引網の
漕出て帰れば浦の月哉

7

花月

秋の来む月の都も今宵こそ
雲井の庭の有明の月

8

故郷月

あれ地は荒れ果て月に
訪て来かに変りかはる

9

山家月

世の塵を遠く離れて長閑なる
ひとり住む山ふかき月哉

10

月前恋

月に恋曲なく晴て恋ひ
恋しき人の来ぬ松山

11

月出

さてもさて秋の夜ながら
待てや月の出るまで

12

月出遅

待もうれしかるべきに
月の遅き昔恋人は

13

月出遅

神の上に雲ぞ月の形見
ながらへぬ中と成ぬ

14

月前述懐

ながらへしもとは思へいなたとん
すむにそやすく水の月哉

15

月前神祭

訪て祭る人の水の陰ゆ
見るみとてこそ秋の月

右之十一首
信義卿
[illegible]

Q　冬音和歌二十一首

＊年次未詳、香川宣阿点。

（端裏）〔破レ〕

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14 15 16 17 18 19

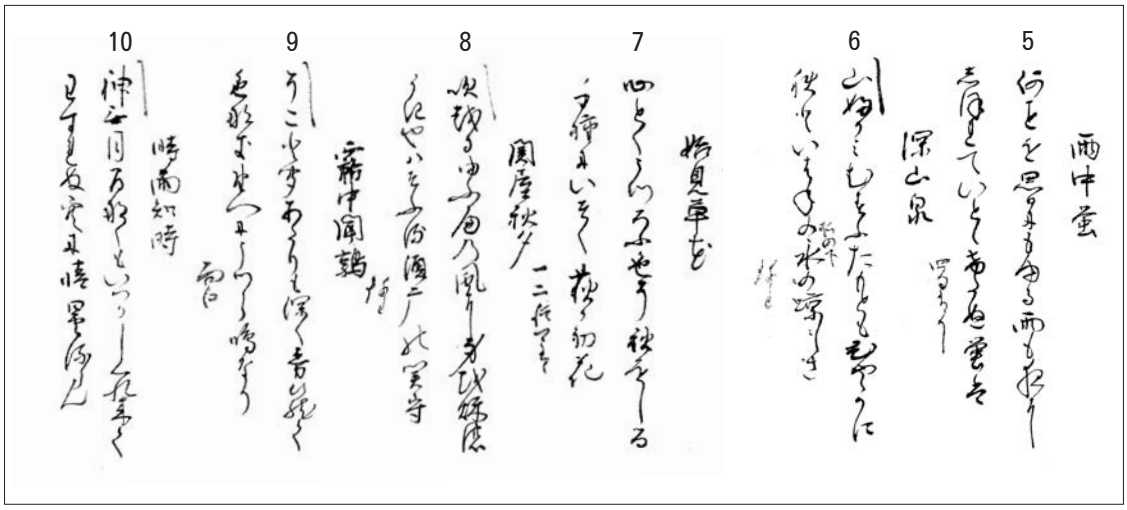
20 21

R　冬音和歌十二首

＊年次未詳、香川宣阿点。

（端裏）ナシ

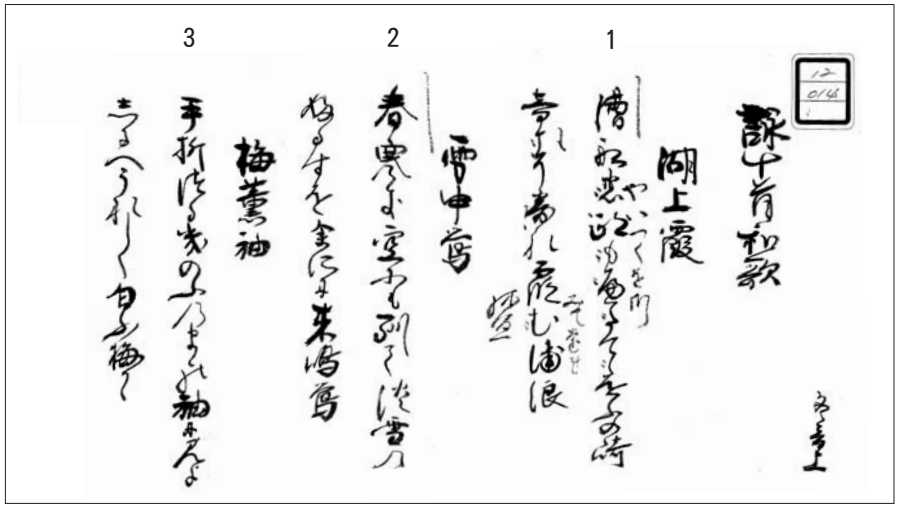
1 2 3 4



S　冬音和歌十首

＊年次未詳、香川宣阿点。

（端裏）ナシ



四四

4　5　6　7　8

9　10

T　冬音和歌十首

＊年次未詳、香川宣阿点

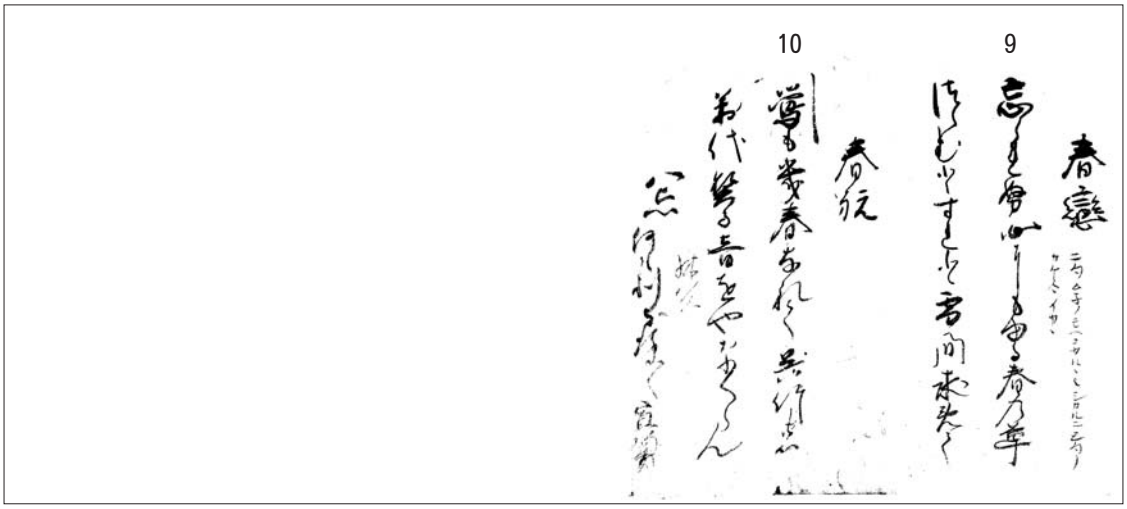
（端裏）ナシ

1　2　3

四五

4
5
6
7
8

9
10

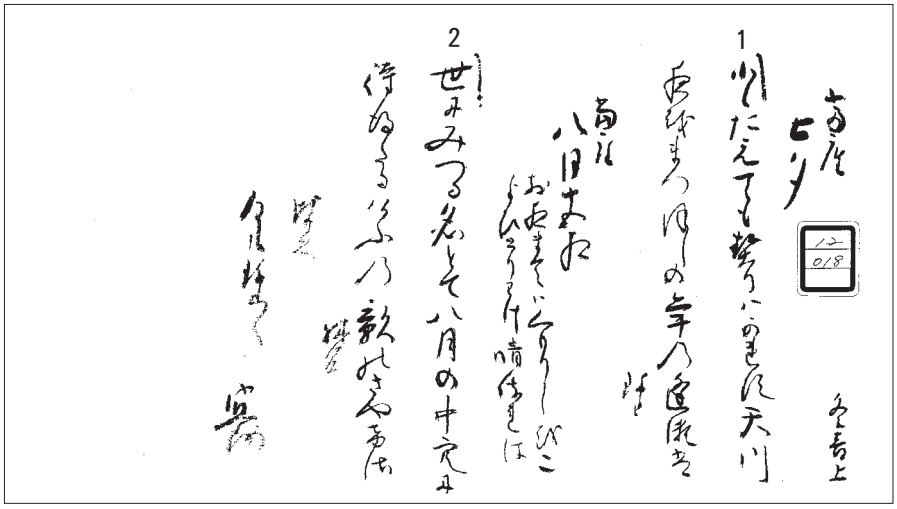


U　冬音和歌二首

＊年次未詳、香川宣阿点。

（端裏）ナシ

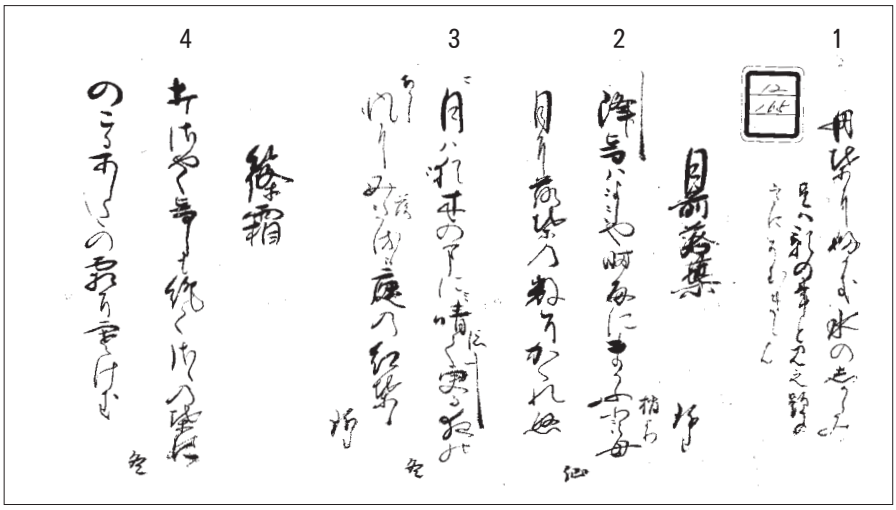
1
2

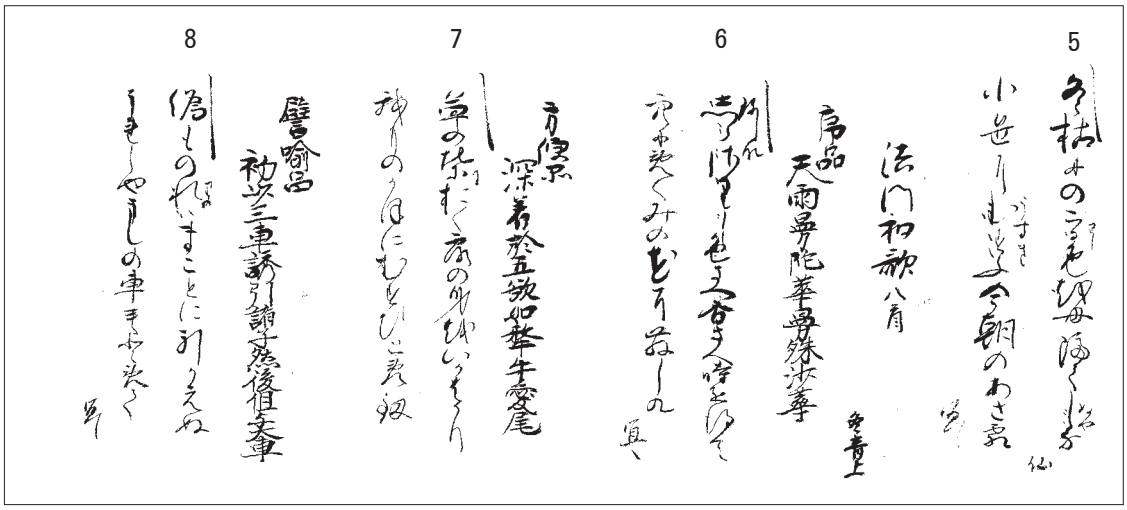


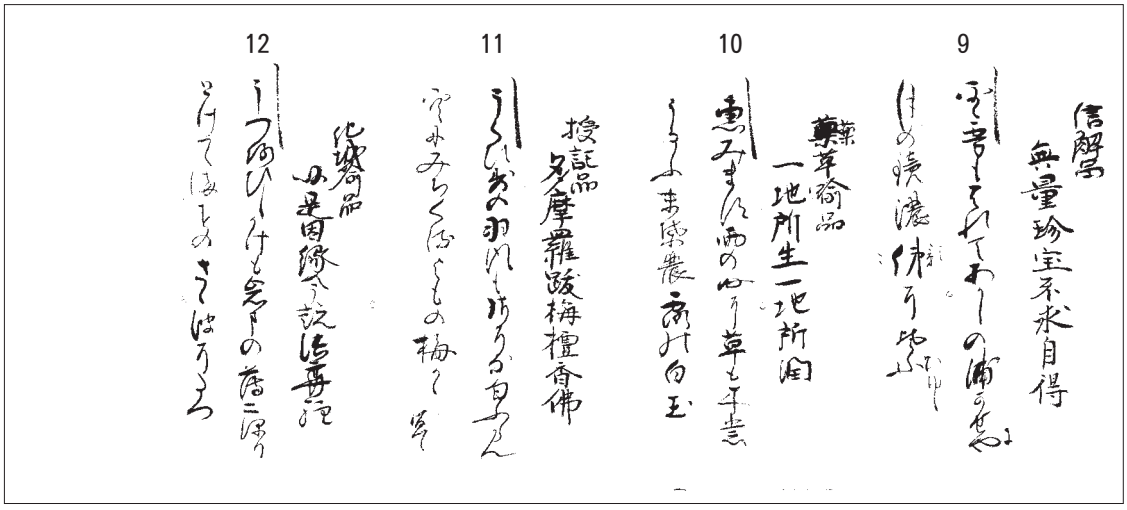
Ⅴ　冬音・仙庵和歌十三首

＊年次未詳、香川宣阿点。

（端裏）前欠〔破レ〕ゆえ不明







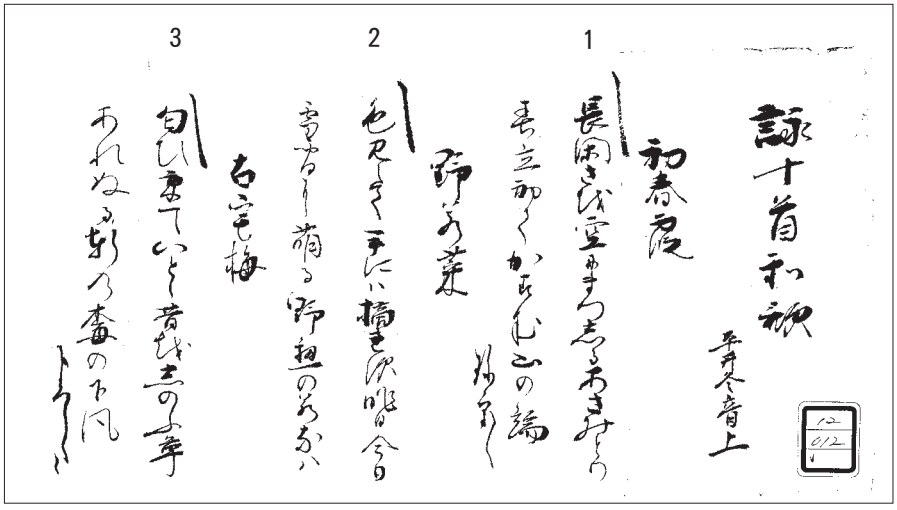
13

五百年の品
以千貫宝珠繋其衣裏
又ところに申くゝ玉濃往

W　冬音和歌十首

＊享保二年七月、香川景新点。

（端書）



1

詠十首和歌

享保二年冬音上

初春霞

長閑さは空ゆ[illegible]

春立加くかすむ心の端

[illegible]

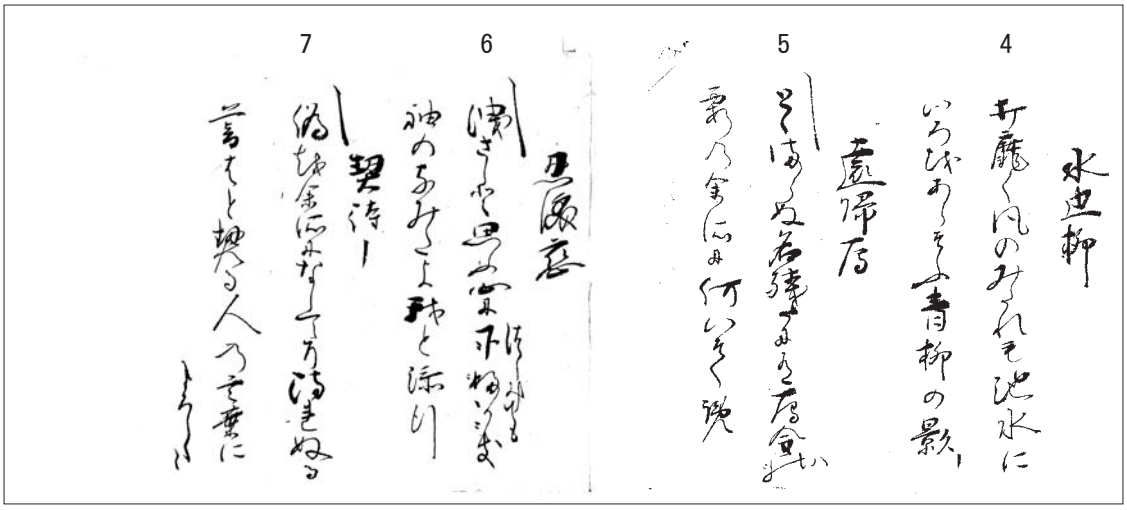
2

[illegible]

[illegible]

3

[illegible]



4

水辺柳

千歳くゝのみれも池水に

いろはあらそふ青柳の影

5

[illegible]

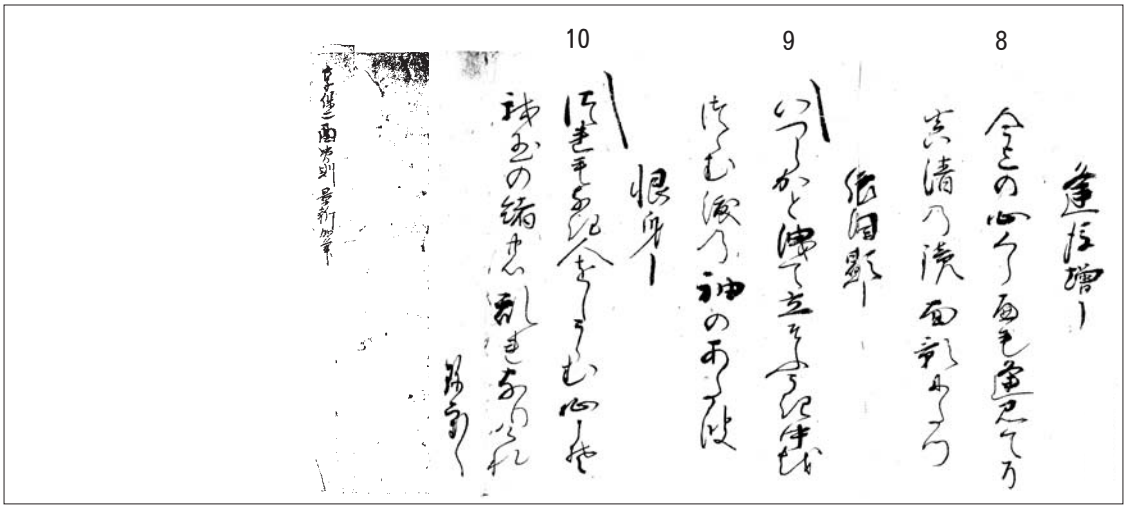
6

[illegible]

7

[illegible]

四八



四九

〈翻印編〉

F　冬音和歌三十首

〔端書〕梅月堂宣阿加筆正徳四午年〔奥ニアリ〕

〔内題〕詠三十首和歌／平井冬音上

霞中滝

1　○打むかふ山は霞のたちこめてなのみおとはの滝のしら波

梅薫枕

2　さしてぬる閨の板間も吹分てまくらにかほる（ママ）梅の下風

○さしこもる閨の板間をもとめてやまくらにかほる（ママ）梅の下風

〈宜候〉

春月

3　○涙にはなを（ママ）こそくもれ春の夜のかすみの袖をいづる月影

〈珍重〉

独見花

4　めかれせぬ花の色香のやさしさに馴てやひとり春の山もり

嶺花

5　○咲初しはなの光にうつろひていとゞ八重たつ峯のしら雲

〈宜候〉

落花

6　○あかず見し梢の色もいたづらにちりて砌の花の白雪

野雲雀

7　○長閑成あしたの原の朝霞たなびく空にひばり鳴なり

時鳥

8　よひ〳〵に覚束なさのひとこゑは誰待つけし山ほとゝぎす

○きくもなを（ママ）覚束なさのひとこゑは誰まくらとふ山ほとゝぎす

〈珍重〉

五月雨

9　○みなの川幾瀬の波も五月雨のひかずにふかき淵と成行

〈宜候〉

沢蛍

10　さは水に移る光を我ぞともしらでほたるやこがれ来るらん

○さは水に移るをを（ママ）のが光ともしらでほたるやしたひ行らん

〈面白候〉

七夕

11　思のみつもり〳〵て天の川こよひあふ瀬や淵となるらん

女郎花

12　○分て猶いろめく野べの女郎花おなじ花のゝちくさながらも

〈珍重〳〵〉

岡鹿

13　○人目をやしのぶの岡の秋風に暮て妻どふさをしかの声

〈宜候〉

尋虫声

14　○から衣すそのゝ露にぬれ〳〵て人待むしの音をぞ尋ぬる

待月

15　山の端の雲をいとひて宵〳〵にまちいでん月の影ぞ久しき

16
湖上月
○鳰の海やなみぢ遙にすむ月の氷をわたる秋のふな人
〈別而珍重〳〵〉
擣衣
おもひのみ誰に契てからごろもひとり伏屋の月にうつらん

17
時雨
降ふらぬ外山の雲のいくめぐり時雨に替るそらぞ隙なき
○降ふらず外山の雲のいくめぐり時雨に替るそらぞ隙なき
〈別而宜候〉
暁千鳥
○ね覚して聞ば哀もありあけの月のこほりに千鳥なくなり

18
炭竈
行末は雪気の雲に立消て煙さびしきまきのすみがま
○行末は雪気の雲に立消て煙さびしきみねのすみがま
〈宜候〉
忍恋
うらみつるなみだも共にせき留て人目しのぶの袖のしらなみ

19
〈「涙」の縁は無候〉
不逢ー
逢まも波の磯辺のかたし貝ひとり物おもふ身をいかにせん
○逢まも波の磯辺のかたし貝われて物おもふ身をいかにせん
〈珍重〉
隔ー

20
こがれ行便もなみのあまおぶ(ママ)ねふかきおもひはうきしづむとも
〈題に不叶候〉
初逢ー
あひ初て今さら替るおもひかなつれなく見へし人のこゝろも

21
別ー
○限あればあかぬ名残も鳴鳥の音にのみかこつきぬ〳〵の空
恨ー
○水茎の岡のくづばしふく風にいとゞうらみの数ぞそひ行

22
絶ー
あかざりし契もいつか絶はてゝ今は夢さへ頼すくなき
古寺鐘
西へとぞこゝろもいそげ紫の雲のはやしの入相のかね

23
旅行
○帰見るみやこのそらも白雲を分てぞこゆるあしがらの山
〈宜候〉
神祇
○榊葉に置そふ露の光まで誠日吉の影ぞくもらぬ

24
〔奥書〕ナシ

G
冬音和歌百首
〔端裏〕梅月堂加筆正徳四午年

〔内題〕詠百首和歌／冬音上

1 立春
待むかふ岩戸の関の朝日影出て神代の春をしるかな
○霞たつ岩戸の関の朝日影出て神代の春や見すらん
〈宜候〉

2 朝霞
朝な〳〵目馴し山の山もせに日影隔てたつ霞哉

3 谷鶯
長閑成春しり初て谷陰の雪にたどらぬうぐひすの声
○長閑しな春しり初て谷陰の雪にたどらぬうぐひすの声

4 残雪
萌出るみどりの草のあらそひてまだらに残る野べの白雪

5 若菜
○とけ初る沢の氷のひま毎に二葉のわかなかぞへてぞつむ

6 里梅
誰里の梅ともわかず天つ風さそふ袂ぞ香に匂ひぬる
○誰里の梅ともわかず春風のさそふ袂ぞ香に匂ひぬる

7 檐梅
○香ばかりは人にもつけよ朝な夕な目かれぬ軒の梅の下風

8 春月
夜しほくむ道やたどらん立籠て月は霞のうらのあま人
○もしほくむ道やたどらん立籠て月は霞のうらのあま人
〈宜候〉

9 春曙
和哥の浦や汀の波も立かへりとをき（ママ）詠の春のあけぼの

10 帰雁
故郷のこゝろはしらず春の雁花をみ捨て何いそぐらん

11 春雨
かきくもる空とも見えず降初て霞をつとふ軒の春雨
○かきくもる空とも見えず降初て霞をつたふ軒の春雨

12 岸柳
浅みどり岸根の水に影とめて春の色そふ青柳のいと
○浅みどり岸根の水に影見えて春の色そふ青柳のいと

13 待花
何にかもたぐへて見ばやあくがれて花待春のこゝろづくしを
〈一、二句、てには不合候〉

14 初花
珍しと見れば心にこもり江の初瀬のさくらそれと計も
〈一首、きれず候〉

15 見花
○世のつらさ逃住身は咲花をこゝろのまゝにみよしのゝ奥
〈珍重〳〵〉

16 花盛
咲てちる習としればあやにくのこゝろをそふる花ざかり哉

落花

五二

17 風誘ふ春の色香も水無野川見るにあだ成花のしらあは(ママ)

款冬

18 春風に匂へる色も玉川のたまとこぼるゝ山吹の露

○春風に匂へる色も玉川やたまとこぼるゝ山吹の露

池藤

19 ○咲かゝる汀の松に行はるをうらむらさきの池の藤なみ

〔「む」ハ裏打後ノ後書〕

暮春

20 うきをのみわすれてむかふ花鳥の色音もつい(ママ)に暮て行春

○うきをのみわすれてむかふ花鳥の色音もいまは春の別路

〈別而宜候〉

〔端裏〕冬音

更衣

21 香ばかりは心に残れぬぎかへてわすれがたみの花ごろも哉

○香ばかりは心に残れぬぎかへてわすれがたみの花のころもに

卯花

22 月とのみ詠る程もうの花のかげ明やすきみじか夜の空

待子規

23 あくがるゝ習なれどもほとゝぎす待にねぬ夜の数ぞ重ぬる

○あくがるゝ心をしるやほとゝぎす待にねぬ夜の数ぞ重ぬる

聞郭公

24 聞ばまた猶こそしたへ一声に雲の外成山ほとゝぎす

○聞初て猶こそしたへ一声も雲の外成山ほとゝぎす

〈宜候〉

杜鵑稀

25 ○たえずのみ聞も習はでみな月の空に稀なるほとゝぎす哉

故郷橘

26 忍べとや絶ても年をふる郷のむかしにかよふ庭の立花

○忍ぶそよいく年月かふる郷のむかしにかよふ庭の立花

早苗

27 雨露の恵もしるく室の苗取や手に〳〵暮いそぐらん

五月雨

28 ぬれてほす隙も波間のあま衣たみのゝ嶋の五月雨の空

○ぬれてほす隙もや波のあま衣たみのゝ嶋の五月雨の空

鵜川

29 篝火もきえては迷ふうき業とおもふにあかぬうぶね成らん

〔「迷」ハ裏打後ノ後書〕

叢蛍

30 雨晴て夏なき庭の草むらや風にほたるの露ぞみだるゝ

○雨晴て夏なき庭の草むらやほたるの露も風にみだるゝ

夏草

31 しげりあふ野守の袖もぬれ〳〵て露にやつるゝ夏草の陰

○しげりあふ野守の袖もぬれ〳〵ていとゞやつるゝ夏草の露

〈宜候〉

夏月

32 待いづる外山の雨の一通り晴て涼しき夏の夜の月

○ふるとみし外山の雨のほどもなく晴て涼しき夏の夜の月

〈別而宜候〉

夕立

33 見るうちにはや消〳〵て村雲の山のよそなるゆふだちの空

○見るうちにはやふり過て村雲は山のよそなるゆふだちの空

杜蝉

34 夏しらぬ常盤の森の夕風に馴て涼しき蝉の声〴〵

〔「夕」ハ裏打後ノ後書〕

○夏しらぬ常盤の森の夕風に涼しくひゞく蝉の声〴〵

夏祓

35 夕風に秋や通へるみそぎ川夏の日影もなみのしらゆふ

早秋

36 吹からに目に見えぬ物の哀さをかねておぼゆる秋の初風

七夕

37 ○天川年の渡りのわりなさにこゝろをちよと星合の空

荻風

38 さらでだに秋のね覚の淋しきをとふにつらさの荻の上風

〔「荻」ハ裏打後ノ後書〕

○さらでだに秋のね覚の淋しきをとふはかなしき荻の上風

萩露

39 こぼれても同じ錦と宮城野や露分袖の萩が花すり

女郎花

40 袖ぬるゝ露やしるべと名にめでゝこゝろをのべのおみなへし哉（ママ）

夕虫

41 けふのみの夕ならぬをきり〴〵す何浅茅生の露になくらん

○きり〴〵す此宿のみの夕とや音にたてゝなく浅茅生の陰

〈珍重〳〵〉

夜鹿

42 ○菅の根の長き夜すがら鳴鹿はいかに難面きつまやこふらん

〈別而宜候〉

初雁

43 はるか成山のいくへの雲わけて見えみ見えずみはつ雁の声

○はるか成山のいくへの雲わけてみやこに来つるはつ雁の声

秋夕

44 かねて知る哀はかすか見聞にもけふたゞならぬ秋の夕暮

〈二句、いかゞ〉

山月

45 待出る心のまゝにうき雲も晴てあらしの山の端の月

野月

46 咲まじる花のゝ露も色に出て詠はるけき秋の夜の月

○咲まじる花のゝ露も色に出てうつるぞあかぬ秋の夜の月

河月

47 ○わきかへり岩打波の玉しまや川風きよくいづる月影

江月

48 朽残る橋は名計ながら江やむかしを月の夜かけて見ん

浦月

五四

49 詠れば波路遙に霧晴て月も長井の浦風ぞ吹

〔「詠」ハ裏打後ノ後書〕

○詠れば波路遙に霧晴て月住の江の浦風ぞ吹

〈よし〉

籬菊

50 うつし植し春より秋の日数へてまがきの霜に匂ふしら菊

○うつし植し春は昨日のほどもなくまがきの霜に匂ふしら菊

〈宜候〉

擣衣

51 ○賤の女のおもひを副て唐衣打明す夜や露にしほれん

暁霧

52 あふ坂や関の戸かけて鳴鳥にね覚あやしき八重の秋霧

岡紅葉

53 ○旅人の袖も千入に夕日影さすや往来の岡の紅葉ば

庭紅葉

54 秋もはや紅ふかくちり初てあらしによどむ庭のもみぢば

九月尽

55 馴てこし哀おもへば長月やけふを限りの秋の夕暮

○馴来つる名残おもへば長月もけふを限りの秋の夕暮

〈宜候〉

初冬

56 ○うき秋の音吹かへて今朝よりぞ冬になるを沖の松風

時雨

57 ぬれてほす袖の日影も雲風にいくたび分ず時雨降空

○ぬれてほす袖の日影もはれくもりいくたび風に時雨来ぬらん

〈宜候〉

落葉

58 秋過て露も時雨ももる山はぬれてやいたく木の葉散らん

朝霜

59 ○夜嵐の音を残して笹の葉に置そふ今朝の霜ぞ寒けき

寒草

60 ○夕暮をうき身にしめし秋もへて霜葉にかはる庭の荻原

千鳥

61 玉川や真砂の月の影更て妻なし千鳥声うらむらん

水鳥

62 池水の深き思を小夜枕ならべて鴛のつがひはなれぬ

○池水の深き思に小夜枕ならべて鴛やつがひはなれぬ

〈宜候〉

氷初結

63 ○音絶る竹のかけひのたまり水よの間を寒み氷初けん

冬月

64 板間もる光はよしや小夜ごろもかさねても猶冬の月影

鷹狩

65 ○狩くらし鳥の落草分侘ぬ交のゝ御野ゝ月に成まで

野霰

66 草の葉の霜やはらふ玉霰ふる野ゝ原の音のさやけさ

67 浅雪

吹誘ふ嵐は松に音さえてまだ浅はかの庭の初雪

○吹誘ふ嵐は松に音さえてまだ深からぬ庭の初雪

積雪

〔「積」ハ裏打後ノ後書〕

68 ○下折の竹のよの間に降籠て山とし積る雪のあけぼの

閑中雪

69 淋しさの夕をしめて降雪にとひこん人と松の下庵

○淋しさの夕をこめて降雪にとひこん人や松の下庵

歳暮

70 春はうき秋はつらきと別しもくらべまおしき（ママ）年の暮哉

寄月恋

71 今は身の心づくしよ待かひもほのめく空の三日月の影

ー雲ー

72 おもひやる心のすへ（ママ）もかきくもり雨とや降ん八重の浮雲

ー露ー

73 消果ん暁かけてよひ〳〵に契るやあだの露の玉の緒

ー雨ー

74 物おもふ夕の空のむら雨は袂からこそ降初にけれ

○物おもふ夕の空のむら雨は袂よりこそ降初にけれ

ー風ー

75 そよかゝる垣尾のまくず恨んとおもふにまだき秋風ぞ吹

ー山ー

76 こひ〳〵て今や心の筑波山このもかのもにあらぬ思を

ー関ー

77 あふさかや関の戸ざしも夜かけておもふが中は人目守らん

ー海ー

78 和田の原立あだ波のよるさへもおもひみだるゝ八重のしほ風

○和田の原立あだ波のよるは猶おもひみだるゝ八重のしほ風

ー原ー

79 忍ねの朝の袖もいとはずよ露を別の小野ゝ篠原

ー橋ー

80 神かけて契りしかひも中空にいつかあだ成久米の岩橋

○神かけて契りしかひも中空に積てはかなき久米の岩橋

〈珍重〉

ー木ー

81 ぬれつゝも便渚の身をつくしいつの月日に恋渡るらん

ー草ー

82 生茂る色も匂もいたづらに身をふる里の軒の下草

〔「たつ」ハ裏打後ノ後書〕

ー鳥ー

83 おもひねも心計よ山鳥のおろの初尾の月日算へて

○おもひねに鳴ぬまぞなき山鳥のおろの初尾の月日算へて

ー虫ー

84 頼めおく夕はかねて一筋におもひ乱れぬさゝがにの糸

○頼めおく夕はかねて一筋におもひ乱るゝさゝがにの糸

五六

85 ー獣ー
はかなさは独臥猪の床とはにあらぬおもひのよをなげく哉
ー玉ー
86 絶てのみ今幻の夢なれやかざしの玉にかけし契も
ー鏡ー
87 ○契きな真清の鏡影とめてむかふこゝろの底井なき迄
ー枕ー
88 見し夢の面影計立副て人はこすげのまくらなりけり
○見し夢の面影計立副て人はこすげのまくらさびしき
ー衣ー
89 世にもれん涙やいとふ小夜衣かさねても猶袖のせばさに
○世にもれん涙ぞいとふ小夜衣かさねても猶せばき袂は
〈宜候〉
ー糸ー
90 乱ては末のあふせもかた糸のかけてくるしき賤のおだまき（ママ）
浦松
91 もしほやく煙を籠て夕なぎや波に一むら三保の浦松
○もしほやく煙を籠て夕なぎの波に一むら三保の浦松
〈か様の「や」の字、よろしからず候〉
窓竹
92 ○学ばやうきふし茂き世の中に馴てすぐ成窓の呉竹
〈珍重〉
山家風

93 いとひにし世のうきよりぞ聞侘ぬ馴てまくらの山おろしの風
〈てには、不合候〉
田家
94 とふ人も絶てあらしの風をいたみ山田のかり庵月や守らん
〈結句のはね、いかゞ〉
故郷
95 遠き世に立も帰らでさゞなみやいく春秋を志賀のふる里
〔「帰」ハ裏打後ノ後書〕
〈四、五のうつり、いかゞ〉
海路
96 沖つ船漕行末もしら波にうきねの夢やせめて頼ん
〈此「せめて」、俗意の様候。俗間に用「せめて」は、心不合候〉
羇旅
97 ○こし方を忍べば遠き明暮に夢もあらしの小夜の中山
述懐
98 世をうしとおもふ計にながらへて老はね覚のなみだ悲しも
神祇
99 ○天が下ひろき恵の跡とめて幾代になりぬ賀茂のみづがき
〔「と」ハ裏打後ノ後書〕
祝言
100 梓弓やまと嶋ねもうごきなきめぐみの数にいかでもれなん
○梓弓やまと嶋ねのうごきなきめぐみの数にいかでもるべき

〔奥書〕ナシ

H　冬音和歌十六首

〔端裏〕梅月堂加筆正徳五年未

〔内題〕詠十首和謌／平井冬音上

1　早秋暁露

秋来ればはやぬれ初てね覚する袖やは露の宿りなるらん

〔「ね覚する」ハ裏打後ノ後書〕

○秋来ればはやぬれ初てね覚する袂や露の宿りなるらん

2　野外夕虫

夕されば小のゝ篠原しのぶにもあまりてむしの音にや立らん

〔古哥の詞、出過候〕

3　嶺上月明

光そふ空のみどりと見しもはやさしのぼる峯の月ぞ曲なき

4　月前雁来

○月は猶ちさとも晴て遙成いなばの雲に雁は来にけり

5　海辺擣衣

○須磨のあまや暇もなみの音副てあかつき深く打衣かな

〔珍重〕

依忍増恋

6　もらさじと思ふに付て泪川いやまさり行袖の白浪

○もらさじと思ふに付て泪川袖行水ぞいやまさりぬる

〔別而宜候〕

7　契不逢ー

○此まゝにおもひや果ん契り置て逢見ぬ中の心づくしを

8　後朝怨ー

今朝は猶恨もそふや思ひつゝ又ねの床のあらぬ夢路に

○今朝は猶恨もぞそふ思ひつゝ又ねの床のあらぬ夢路に

9　旅宿寝覚

草枕（ママ）をなじうき身のうきめだに幾夜ね覚に替りもぞする

10　社頭松久

○君が代に吹つたへつゝ神路山めぐむ百枝の松の下風

外に／冬日三首題／冬音上

11　寒草

いつのまにうつろひ初つ野べは皆秋見し花も霜の下草

○いつのまにうつろひはてゝ野べは皆秋見し花も霜の下草

12　聞侘し哀は夢か風ならでさらに淋しき霜の荻原

13　氷

○さゆる夜は猶水鳥のとことはに馴てくるしき池のうすらひ

14　三嶋江や折臥蘆の上氷むすぶも深き水のこゝろを

15　雪

かきくもる空を霞とみよしのやさながら雪も花の白妙

16 ○かきくもる空を霞とみよしのやさながら雪も花の面影
〈宜候〉
村雲はかゝれど積る雪に今近まさりぬる遠の山の端
〔奥書〕合点十首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）

I **副雄等和歌三十首**
〔端裏〕宣阿加筆正徳五未年
〔内題〕詠三十首和歌／冬音上／仙庵上

1 暁霞　副
横雲の立とも見えず打むかふ山の端いとゞ霞増れる
○横雲の立とも見えず打むかふ山の端かけて霞む明ぼの
〈宜候〉

2 常
山の端もほの見ゆるより明初て麓の里に立霞かな

3 海帰雁　冬
仮初の宿りも波のちへもゝへ海原遠く帰る雁がね

4 常
見送れば果しもあらぬ海原を雲にかくろひ帰る雁がね
○見送れば果しもあらぬ海原の雲の浪路を帰る雁がね
〈珍重〉

5 苔上落花　副
白妙に散埋みぬる花を今朝雪とみどりの苔の通路

6 仙
○風誘ふ梢の花のしらゆきにこけのみどりの色も移らふ(74)

7 樹陰卯花　仙
夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる宿のうの花
○夏迄も木陰は雪の残るかと驚かれぬる庭のうの花
〈珍重〉

8 冬
消残る雪と見えしも木隠に猶日数へて咲るうの花

9 雨後蝉　仙
○村雨の晴行あとは雲もなき空までひゞく蝉の諸声
〈宜候〉

10 冬
夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき衣手の森
○夕立の名残の露に鳴せみの声も涼しき森の下陰
〈珍重〉

11 閑庭露　常
夫かとも問れぬ庭は秋草に心のまゝの露のゆふ暮
〈「露の夕暮」、制の詞にて、よまぬ事に候。制の詞の内、「雪の夕暮」「雨の夕暮」「露の夕暮」、よみ不申よし〉

12 副
あだなりと見し世の露も今更にこゝろをみがく浅茅生の宿

○あだなりと見し世の露も今更にこゝろくだくる浅茅生の宿
水郷月　仙

13 澄月の影を移して水瀬（ママ）川波の底にも秋のいろ哉
〈結句、いかゞ〉　副

14 ○眺やる水上遠くてる月のひかりに下す宇治の柴ふね
〈風景宜候〉
行路紅葉　仙

15 ちしほ迄染し楓を分行ば袖さへ秋のいろに出けり
○ちしほ迄染し楓を分行ば袖さへ秋のいろに出ぬる
常

16 玉鉾の道行人の袖笠も共にしぐれの染る丹葉々
〈「笠」の字出候、詮なく候〉
落葉　副

17 ○吹誘ふ音を聞にも冬の夜のあらし淋しく木葉降なり
〈宜候〉　仙

18 今朝見れば積る落葉に浅茅生のめ馴し庭も面替りして
寒蘆　副

19 いつとなく枯て砌の池寒み蘆の臥葉ぞ氷閉ぬる
冬

20 ○水鳥の床もあらはに三嶋江や霜枯寒き蘆の村立
〈宜候〉

近恋　常

21 いかなれば軒端に並ぶしのぶ草余所めに袖の涙せくらん
冬

22 ○いひかはす蘆の中垣へだてゝも思ひは同じ軒の下草
馴恋　冬

23 ○おもひせく泪の雨の折〳〵になれていろそふ山姫の袖
仙

24 しのびあひし昔も同じ思ひには馴し印と何をかはせん
寄灯恋　仙

25 ○窓しろく明行閨にともし火のきゆる斗の思ひをぞする
常

26 待詫（ママ）てひとりぬる夜の灯はもへ（ママ）ておもひのくらき物かは
故郷　常

27 ○何国ぞとさして分べき方もなしむぐらに閉る古里の庭
〈宜候〉　冬

28 斧の柄の朽もしらず住荒て里はむかしの面影ぞなき
榊　副

29 神垣や隔はあらじ榊葉の香を一筋に留てさゝまし
冬

30 ○千早振神代のまゝに榊葉も栄ひさしき天の香久山
〈宜候〉

六〇

〔奥書〕点十六首／此一巻近来之内／別而御秀逸／珍重〳〵／宣阿（花押）

J　副雄等和歌三十首

〔端裏〕梅月堂加筆正徳六申春

〔内題〕詠三十首和謌／山本副雄上／長沼仙庵上／平井冬音上

早春霞

1　○きのふけふ春になるとの浦遠き波路長閑にたつ霞かな

2　雪ながら今朝は霞の衣きて春めづらしき山姫の袖

3　○昨日今日波の花よりたつ春に海原とをく霞たな引

〈宜候〉

静見花

4　○咲花の光のどけき春の日はよそに心の散方ぞなき

〈宜候〉

5　いとゞ猶長閑にむかふ我宿のはなにあらしの音もなき日は

6　○むかひみる心長閑けし我宿のはなにあらしの音たゆる日は

長閑成日影なればやあやにくの心を花にそめて詠ん

野郭公

7　○一声にふりさけ見ればほとゝぎす影もなつ野ゝ末の白雲

〈珍重〉

8　夏草の茂れる野辺に郭公をのが（ママ）五月と千百帰啼

9　○子規のもりの鏡すむ月の影やしたひて落帰りなく

深夜蛍

10　夏草の露も置そふ夜を深みもゆる蛍の影ぞさびしき

11　○夏草に置そふ露も深き夜にもゆる蛍の影ぞすゞしき

〈珍重〉

12　音に立ぬおもひはいとゞ深き夜にすだくほたるぞもゆるかひなき

13　○更る夜は猶も蛍のおもひ川下行水に影ぞ乱るゝ

〈宜候〉

海辺月

14　蜑の住蘆屋の軒は満汐とともに影さす秋の夜の月

15　○詠やる雲より波の果ぞなき海原てらす月の光に

ねられじな蜑の磯屋の苫びさし影さす月に身をしかこてば

山紅葉

16　日数ふる秋の時雨にをく（ママ）山も端山も今は紅葉してけり

〔「をく山も」ハ後書〕

17　○まなくふる秋の時雨にをく（ママ）山も端山も今は紅葉してけり

〈宜候〉

夜のま降時雨や染しきのふより今朝は色濃き峯の枕葉

六一

18 ○よるのまの時雨や染しきのふより今朝は色濃き峯の柞葉
〈宜候〉
山はみないろもちしほに夕附日さしまどはせる柞葉の影

19 朝寒蘆
いづる日の光も寒き難波江の蘆の霜葉に浦風ぞふく
○いづる日の光も寒き難波江の蘆の枯葉に浦風ぞふく

20 ○出る日にむかふも淋し難波潟霜枯さむき蘆の群立
21 池の面は日影もさすか冬枯て朝霜まよふ波の群蘆

22 関路雪
足柄の関の戸ざしと雪は降ど道し有世は往来絶せぬ
○足柄の関の戸ざしと雪は降ど道し有世は往来絶せず

23 積れども道有御代の関の戸や雪にたどらぬ相坂の山
24 降雪に埋れはてゝいづくにか不破の関屋の跡し尋ん
○降雪に埋れはてゝいづくにか不破の関屋の跡を尋ん

25 忍待恋
待に来ぬ人もしるらめ諸共にしのぶに付て夜の更るとは
○待に来ぬ人もしるらし諸共にしのぶに付て夜の更るとは
〈珍重〉

26 ○色に出ぬ軒のしのぶの露の袖ぬれて幾夜か待習ひけん
27 さらでだに待は物うき終夜人目しのぶの涙かこたん

28 稀逢恋
○打とけて又いつかはと結ばましあふよまれなる中の下紐
〈珍重〉

29 誓ひぬる神もしらじな希にのみ枕の塵をはらふ契は
30 ○思ひいづる恨も解て七夕の契にたぐふ夜半の下紐
〈宜候〉

〔奥書〕合点十九首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）

K 仙庵等和歌十六首

〔端裏〕宣阿加筆享保元丙申
〔内題〕詠十六首和謌／長沼仙庵上／平井冬音上

1 兼題 鶯為友
余所に又友は求し永き日を慰めてなく鶯の声
○余所に又友は求し永き日を慰めてきく鶯の声
〈宜候〉

2 聞初て今更春の友なれや軒端に通ふ鶯の声
3 呉竹の千代をしらべし初音よりなれて友なる宿の鶯
○呉竹の千代をつげこし初音よりなれて友なる宿の鶯
〈珍重〉

4 梅がゝに馴てぞ来鳴鶯は栄行宿の春の友なれ

5 当座柳風
長閑成風に春しる若緑まだ色見せぬ青柳の枝

6 春風に猶幾度かむすぼるゝあとよりとくる青柳の糸
○春風に猶幾度かむすぼほれとくるもやすき青柳の糸
〈宜候〉

7 月前梅
梅がゝの匂ひもふかき木の間さへ立枝ばかりに霞む月影

8 見渡せば木の間漏来る月影にふかくもやどる袖の梅がゝ
○ながむれば木の間漏来る月影もやどりてふかき袖の梅がゝ
〈珍重〉

9 霞中帰雁
空近く鳴つゝ帰る雁金もやがて霞を隔てぞきく

10 年毎に帰り馴ずは八重霞む雲路をいかに春のかりがね
○年毎に帰り馴ずは霞たつ空にまよはん春のかりがね
〈珍重〉

11 夜思花
帰るさの花の名残にねてもなを面影さらぬ春の夜の夢（ママ）

12 永き日を花に染たる心とて梢に通ふ春の夜の夢
○永き日を花に染たる心とて木陰に通ふ春の夜の夢
〈別而宜候〉

13 春神祇
此まゝに千代も曇らじ春日山春のひかりに向ふ心は

14 ○春をへて千代も曇らじ春日山神のひかりに向ふ心は
〈別而宜候〉
天下おほふ日影も春に今さすか三笠の山は長閑し

15 春祝
わたつ海の真砂の数はつくるとも神代の春は限しられず

16 ○わたつ海のそこの真砂はつくずとも神代の春の数はしられじ（ママ）
立帰る春ぞといへば年毎に替らぬ御代の風ぞ長閑き
〈奥書〉合点八首／此巻別而宜敷／珍重〳〵　宣阿（花押）

L **冬音和歌十二首**
〈端裏〉宣阿加筆享保元丙申夏
〈内題〉詠十二首和謌／平井冬音上

1 嶺樹霞
空に先霞み初けり高円の尾上の松も春を深めて
○空に立霞やいくへ高円の尾上の松も春を深めて

〈宜候〉
湖水余寒
2 長閑成ながめもあやしよる〳〵はまたさへ帰る志賀の浦波
○長閑成朝夕ならよる〳〵はまたさへ帰る志賀の浦波
〈珍重〉
窓前梅
3 ○尋来る人の袖には梅がゝをなを吹こめよ窓の春風
〈宜候〉
月前帰雁
4 ○霞つゝ心ぼそくも帰らん月に音を鳴春の雁金
〈別而宜候〉
雨中春草
5 けふ幾日晴ずふるやのしのぶ草しのに萌初る春雨の空
山花如錦
6 ○帰るさの袖に折ばや詠来て山路暮せる花の錦を
暮春鶯
7 ○朋とせし春の日数も杉の戸に名残やつけて鶯のなく
〈宜候〉
寄暁恋
8 独ねも馴し別を習ひにて心迷はす暁のそら
〔「習ひ」ハ後書〕
○独ねも有し別をしたひ出て心迷はす暁のそら
寄朝ー
9 黒髪もみだれて猶ぞ忘られねあしたの床に残る涕
○黒髪もみだれて猶ぞ物思ふあしたの床に残る涕
〈珍重〉
寄昼ー
10 山鳥のよるの思ひか袖にせく我なみださへひるま成らん
寄夕ー
11 来ぬ人を待とはなしに物おもふゆふべの空ぞ面影にたつ
寄夜ー
12 ○我ならぬつらさとや見ん逢馴て又ひとりぬる夜半の思ひは
〈宜候〉
〔奥書〕合点九首／右何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）

M 冬音和歌二十首
〔端裏〕享保元年申ノ七月日梅月堂加筆
〔内題〕詠二十首和謌／平井冬音上
雲間郭公
1 ○殊更になごりぞしたふ時鳥雲の絶間をもらす初音は
江中菖蒲
2 ○風かほる水のみどりも深き江になびく菖蒲の影ぞ涼しき
〈よろしく候〉

六四

3 門田早苗
せき入る水の心も外よりぞわきて門田に早苗取也
暁更照射

4 ○寄鹿の目合す程も短夜やともしのかげの余所に明行
旅舟五月雨

5 漕ふねの苫の雫に濡初てうきね侘しき五月雨の空
○とまりぶねの苫の雫に濡初てうきね侘しき五月雨の空
寝覚水鶏

6 聞馴てぬるが中にも幾度かね覚しらする水鶏成らん
叢中蛍火

7 夏草の茂き思ひのむねの火もこがれていとゞよるほたる哉
毎夜鵜川

8 消もせめやみより闇の夜をこめて篝火たのむ鵜舟悲しも
○消もせずやみより闇の夜をこめて篝火たのむ鵜舟悲しき
池上蓮

9 よる波も玉かとばかり池水に心をみがく露の蓮葉
林頭蝉

10 ○陰深き岡べの松の夕風に梢をわたる蝉の諸声
寄初草恋

11 ○浅からず根ざしにけりな初草のはつかにもゆる下の思ひも
寄忍草ー

12 此まゝに朽も果なばふる里の軒にしのぶの草の名もうし
○此まゝに朽も果なばふる里の軒にしのぶの草の名ぞうき
寄思草ー

13 ○うら枯る尾花がもとの思草おもほえずのみ色に出らん
寄下草ー

14 わりなしやうき名は余所に守山の時雨も染ぬ松の下草
寄忘草ー

15 つれもなき種や蒔けん住の江の岸根に生ふる恋忘草
暁遠情

16 哀しる唐土人のこゝろまでね覚もよほす袖の泪に
〈「ね覚」、題にてはよみ候。たゞは、四十歳以上にてよみ候〉
夕幽思

17 物おもひに猶も立まふうき雲の夕をいとふ行末の空
雲浮野水

18 立ぬるゝすそのゝ水の草がくれ行かふ雲も影をひたして
旅宿夢

19 草枕結びもはてず故郷は夢にも猶や遠ざかるらん
○草枕結びもはてず故郷は夢にさへ猶遠ざかり行
〈珍重〉
寄神祝

20 ○治まれる代々の恵は行末もかけてぞおもふ神の白木綿
〈面白候〉

〔奥書〕ナシ

六五

N　冬音和歌十首

〔端書〕享保元申冬梅月堂吟味

〔内題〕詠十首和歌／平井冬音上

朝雪

1　待つけし友さへいたふ今朝はまづ跡おしまるゝ雪の詠に

○今朝はまづ跡おしまれてとはるべき友さへいとふ宿の白雪

〈宜候〉

夕雪

2　山の端は暮るとも見えず降雪にねぐらやしたふ村鳥の声

○暮るとも見えぬ山べの雪の色に鳥はねぐらをしたひてぞなく

〈別而宜候〉

夜雪

3　ひまもるかぬる夜も深き窓の中にあつめぬ雪の光をぞ見る

○ひまもるかむかふ夜深き窓の中にあつめぬ雪の光をぞ見る

〈珍重〉

山雪

4　色見えて降程もなし高砂の尾上にかゝる雪の白雲

〈雪の降候時は「白雲」に、亦晴候日の雲は「白くも」〉

野雪

5　○面影は猶ふりかはる深草や霜より後の野辺の白雪

〈宜候〉

岡雪

6　冬籠る下のおもひやいはしろの岡の草根も積るみ雪に

〈万葉の古哥を出され候へども、上句下へかけ合、ふし立のみかの様に候〉

浦雪

7　○類ひなや波もひとつに白妙の雪を敷つの浦の眺は

〈珍重〉

川雪

8　○岩間〳〵氷れる上に色見えて猶しら雪はふる川の水

松雪

9　○降まゝに風はよはりて松の葉の色もつれなく積る雪哉

竹雪

10　○降埋む夜の間の雪の声聞や下折ふかき軒の村竹

〈宜候〉

〔奥書〕合点八首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）

O　冬音和歌十首

〔端書〕享保第二丁酉夷則梅月翁宣阿点

〔内題〕詠十首和歌／長沼寿仙庵上／雪竹軒融成冬音上

六六

1 首夏風

吹風の涼しさいとふ夏衣花の匂ひもわすれがたみに

○吹風の涼しさぞまつ□□□□（カスレ）□花の匂ひも夏の衣に

〈宜候〉

2 新樹

若葉さすかげも木深く池水にみどりをそふる庭の夏山

○若葉さすかげも木深く池水のみどりをそふる庭の夏山

〈宜候〉

3 暁子規

天の戸も押明がたの時鳥誰きぬ〳〵に鳴て行覧

4 早苗

豊成代にあふ田子も秋かけてうゆ（ママ）る早苗の緑涼しき

5 山夏月

雨晴る槙の葉山の露のまにあくるぞをしき夏の月影

○雨晴る槙の葉山の露のまにあくるぞをしき夏の夜の月

6 初恋

迷ふとも深く踏見ん恋の山おもひ初ぬる心くらべに

○迷ふともよしや踏見ん恋の山おもひ初るもふかき心に

〈珍重〉

7 不逢ー

見る影も泪に晴ぬ月なればいつの雲間にめぐりあふべき

8 恨ー

○馴て今うらむもくやし月草のうつろひやすき人の心に

9 山家夢

ぬる間さへあらしはげしき柴の戸や絶て久しき夢の通路

○ぬる間さへあらしはげしき柴の戸に中絶てうき夢の通路

10 嶋鶴

○千代を経てをの（ママ）が契りも添行や三嶋がくれの友鶴の声

〈珍重〉

〔奥書〕合点七首／何も面白珍重〳〵／宣阿（花押）

P 冬音和歌十五首

〔端裏〕丁酉臘宣阿点

〔内題〕詠月十五首和謌／平井冬音上

1 十五夜月

○相坂や関路遙にひく駒の影もたどらぬ月のさやけさ

2 月前風

いでぬまの音には替て澄月のそらにはげしき峯の松風

○いでぬまの音には替て月影のそらにぞすめる峯の松風

〈宜候〉

3 月前露

○晴る夜は苅田の面の稲筵露敷床をてらす月影

山月

六七

4
富士の根に夕居雲は上なれや待出る月に山風ぞ吹
野月

5
○類ひなや色さへ香さへ露深き花にうつろふ野べの月影
〈宜候〉
浦月

6
○蘆田鶴の声さへ遠く引汐につれてふけゐ（ママ）の浦の月影
〈珍重〉
花洛月

7
秋にすむ月の都の名も高き雲井の庭の有明の影
故郷月

8
○あれ増る飛鳥の里に月ひとり馴てむかしにすみもかはらず
山家月

9
○世に通ふ心も絶て長き夜をひとり太山にすめる月影
〈珍重〉
月前雁

10
月は猶曲なく晴て飛雁の影も見え行末の松山
○月は猶曲なく晴て飛雁の影も見え行秋の半天
〈「松山」、なくてもよく候〉
月前虫

11
○さらでだにうき秋の夜を鳴虫もふけてや月の影うらむ覧
〈宜候〉
月前鏡

12
俤もうきいつはりに曇りけん月の鏡に昔おもへば
月前恋

13
○袖の上にやどれる月を形見ともしらでつれなき中と成覧
月前述懐

14
しらざりしもとの心やいかにたえんすむこそやすき水の月影
月前神祇

15
○馴て猶よるべの水の浅からぬめぐみをてらす秋の夜の月

〔奥書〕合点十一首／何も面白／珍重〳〵／宣阿（花押）

Q
冬音和歌二十一首

〔端裏〕〔上部破レ〕宣阿点
〔内題〕〔上部破レ〕歌／僊庵上／冬音上／独吟

1
旅宿梅
思はずもねし夜の床の草枕誰たよりもて梅匂ふらん
○草枕ねし夜の床に思はずも誰たよりにか梅匂ふらん
〈宜候〉
故郷柳

2
したへとや昔のあとを水草ゐし板井にうつす青柳のいと
〈うた、くらく候〉
水郷春月

3
立籠てかすめる空やさだかにも影はみつ野ゝ春の夜の月

六八

○川浪のかすめる空やさだかにも影はみつ野ゝ春の夜の月
梨花

4 朝夕のそらのひかりも真白なる軒のつまなし花咲に鳧
〈一、二句、可有候〉
燕

5 ○空に見し翅もやがて山里の古巣に通ふつばくらめ哉
雉子

6 ○狩衣すそ野ゝ草葉萌るより有かしられず雉子鳴らし
〈別而宜候〉
苗代

7 恵ある雨の心にふかめつゝ水口まつる小田のなはしろ
○恵ある雨の心をあふぎつゝ水口まつる小田のなはしろ
〈宜候〉
初花

8 ○今日幾日待とせし間に咲初て花に成行人の世中
夕款冬

9 人問どたそかれ時の空目にもいはぬいろなる山吹の花
〈上下かけ合ず候〉
藤花似雲

10 ○はる〴〵と打出て見れば雲にのみまがへて咲る田子のうら藤
〈別而宜候〉
更衣

11 ○惜むそよ花染衣色も香も夏たつけふの袖の名残に
都鄙更衣

12 みやこよりけふ立かへて花染も化になりぬる木曽の麻衣
〈下句、可有候〉
待郭公

13 ○などてかく待に心の奥深く初音しのぶの山ほとゝぎす
〈珍重〈〉〉
牡丹

14 あかず見ん人のこゝろに咲初る花も匂ひもはつか草哉
〈二所にて、きれ候〉
水鶏

15 ○月ならでさすとも見えぬ天の戸を絶ず水鶏の何たゝく覧
〈珍重〈〉〉
樗

16 夕されば雲間の露も吹風にみだれて涼し樗咲影
○夕されば雲間の露も吹風にみだれて涼し樗咲陰
〈宜候〉
五月五日

17 引つゝも枕ゆはましあやめ草刈葺軒のつまともろねに
〈結句、可有候〉

18 ○光そふあやめの露も袖の上に落て五月の玉と乱るゝ
〈珍重〈〉〉

19 ○菖蒲草刈ふく宿も浅茅生のしげみがくれにかほ（ママ）る涼しさ
〈宜候〉

六九

20
○けふは又幾千代となく長き根をためしに引て菖蒲葺也
〈別而宜候〉
寄竹祝

21
色深き千尋の竹の若緑幾よをこめて影やそはなん
○色深き千尋の竹の若緑幾よをこめて影しげるらん
〈宜候〉

〔奥書〕合点十五首／何も面白御詠共／御工夫御升進／大ニ珍重
〈〉／宣阿（花押）

R
冬音和歌十二首
〔端裏〕ナシ
〔内題〕詠十二首／冬音上

1
都早春
立籠てかすむぞしるき春来ぬと都は野辺の雪のひかりも
○立籠てかすむにしるし春来ぬと都は野辺の雪のひかりも
〈殊宜〉
望山待花

2
○咲ぬやとこゝろに掛る白雲に花待なれてむかふやまのは
〈殊宜〉
簾外燕

3
○永き日をこすのひまなく古巣とふ軒のつばめはかげもはなれず
〈よろし〉
岡辺早苗

4
取からにいそぐ早苗のかひやある軒端の岡につゞく田面は
○取〳〵にいそぐ早苗のかひやある軒端の岡につゞく田面は
〈尤候〉
雨中蛍

5
何ごとを思ひにもゆる雨も夜にしほれていとゞけたぬ蛍は
〈四句、可有候〉
深山泉

6
山ふかみむすぶたもともひやゝかに秋といはねの水の涼しさ
○山ふかみむすぶたもともひやゝかに秋といはねの松の下水
〈珍重〉
始見草花

7
心とくうつろふ色ぞ秋をしる千種にいそぐ萩が初花
〈一、二、猶可有候〉　〔「いそく」ハ貼紙後書〕
関屋秋夕

8
○吹越るゆふべの風に身を秋のうきやはそふる須磨の関守
〈珍重〉
霧中聞鶉

9
○そこと聞あたりも深く霧籠て色なき野べにうづら鳴なり
〈面白〉
時雨知時

七〇

10 ○神無月まなくもいつかしぐれ来てわすれぬ空に晴曇るらん
炉火忘冬

11 ○かきおこす宵のすさみに寒るを□（破レ）わすれて更る閨の埋火
〈よろし〉
山家冬雨

12 ○霜雪に人目かるれば住とても世に遠ざかる山ぞ淋しき

〔奥書〕愚点十首／何も面白風体好／珍重〳〵／宣阿（花押）

S 冬音和歌十首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕詠十首和歌／冬音上

1 湖上霞
漕船の跡もへだてゝをふの崎音こそ寄れ霞む浦波
○漕船やいづくをさしてをふの崎音も霞みて遠き浦波
〈殊宜〉
雪中鶯

2 ○春寒き空にも馴て淡雪のふるすを余所に来鳴鶯
梅薫袖

3 手折つるきのふのまゝの袖に見よしるべうれしく匂ふ梅がゝ
山家花

4 したひ来る人目もあれど松の戸に花の香誘ふ風はいとはず
○したひ来る人もありやと松の戸の花の香誘ふ風はいとはず
〈よろし〉
里款冬

5 里の名やいはでもそれとみちのくのこがね色にも咲る山吹
○里の名はいはでもしるしみちのくのこがねの色に咲る山吹
〈殊宜〉
寄暁恋

6 身のうへにかけなばうしや難中の暁いそぐ鳥の八声ぞ
○身のうへにかけなばうしや難中の別をいそぐには鳥の声
〈珍重〉
ー朝ー

7 又いつと契るにかへて起居すはあしたの床をいかではなれむ
ー夕ー

8 絶てだに思へばさすがこし時の夕に似たる空ぞえならぬ
○絶てだに思へばさすがこし時の夕に似たる空もなつかし
窓雨晴

9 軒はまだしたゝる雨の音ながら夕の窓に晴る日のかげ
○軒はまだしたゝる雨の音ながら夕日のかげぞ窓にかゞやく
〈よろし〉
山寺灯

10 ○消やらで幾世高野の山陰に暁てらす法の灯

〔奥書〕愚点八首／何も珍重〳〵／宣阿（花押）

T　冬音和歌十首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕詠十首和歌／冬音上

初春

1　○やゝとくるこほりのひまに吹かけて池のなみよる春の初風

〈風体好、珍重〳〵〉

残雪

2　春もまだ日影至らぬ蘆垣や間ぢかき去年の雪の通路

〈日影ノ至ラヌト云ハ、イカヾト。五句も不宜〉

梅風

3　○難波江に吹風さそふ咲やこの花も時しる春にかほ(ママ)りて

〈よろし〉

柳露

4　○散と見て猶枝つたふ青柳のいとゞおもげになびく朝露

〈殊宜〉

帰雁

5　○花をまつこゝろもしらで帰るやと恨むもしたふ春のかりがね

〈珍重〉

春月

6　○物思ふ我泪より霞むともしらじな袖に宿る月影

〈珍重〉

見花

7　あく世だに限りもなしや花に馴て見てもみまくのほしき色香は

○あくとなき心をしるや桜花見てもみまくのほしき色香は

〈殊宜〉

款冬

8　○散やらぬ花も絶〳〵川水にながれて井手の岸の山吹

春恋

9　忘られぬ心にもゆる春の草つゝむとすれど雪間求めて

〈二句、ムネノモヘ(ママ)コガルゝ也。シカルニ、三句ノカケ合、イカヾ〉

春祝

10　○鶯も幾春なれて呉竹の万代契る音をやなくらん

〈殊宜〉

〔奥書〕八点／何も別而珍重〳〵　宣阿（花押）

U　冬音和歌二首

〔端裏〕ナシ

〔内題〕ナシ／冬音上

1 当座／七夕
○とだえても契りはかれず天川夜をまつほしの年の逢瀬は
〈珍重〉
当座／八月十五夜
前夜まではくもりしを、こよひとりわけ晴侍れば
2 ○世にみつる名とて八月の中空に待得たるけふの影のさやけさ
〈殊宜〉
〔奥書〕皆之／何も珍重〳〵　宣阿

V 冬音・仙庵和歌十三首

〔端裏〕前欠（破レ）ゆえ不明
〔内題〕同　右

1 〔前欠（破レ）〕丹葉にふかき水のしがらみ
〈是は影の事と見え、題のこゝろにそむき候はん〉
月前落葉　仙
2 降音はよしや時雨にまがふとも月に落葉の数ぞかくれぬ
○降音は時雨にまがふ梢より月に落葉の数ぞかくれぬ
〈珍重〉
冬
3 月は猶木のまに晴て更る夜の風ぞみだるゝ庭の紅葉ゝ
○更る夜の月は木のまに晴添てあらしに落る庭の紅葉ゝ
〈珍重〉
篠雪　冬
4 打さやぐ音しも絶てさゝの葉にのこるあしたの霜ぞ寒けき
仙
5 冬枯にのこる色をも隔てじな小笹にむすぶ今朝のあさ霜
○冬枯にのこりし色も隔てぬや小笹にうすき今朝のあさ霜
〈宜候〉
法門和歌八首／冬音上
序品／天雨曼陀華曼珠沙華
6 しらざりし色さへ香さへ時を得て空にめぐみの花ぞ散しく
○珍しな色さへ香さへ時を得て空にめぐみの花ぞ散しく
〈宜候〉
方便品／深着於五欲如犂牛愛尾
7 草の葉（ママ）おく露の身をいかばかり我ものがほにむすびとめ剣
○草の葉におく露の身をいかばかり我ものがほにむすびとめ剣
譬喩品／初以三車誘引諸子然後但与大車
8 偽ものればまことに引かえ（ママ）ぬうれしやうしの車もとめて
○偽ものりのまことに引かえ（ママ）ぬうれしやうしの車もとめて
〈宜候〉
信解品／無量珍宝不求自得
9 雲霧もはれてあかしの浦かぜや月の鏡の俤ぞそふ
○雲霧もはれてあかしの浦かぜに月の鏡の影ぞそひゆく

薬草喩品／一地所生一地所潤

10 ○恵みます雨の心に草も木もうるふ末葉の露の白玉

授記品／多摩羅跋梅檀香仏

11 ○うぐひすの羽風もさぞな匂ふらん空にみちくるよもの梅がゝ

〈宜候〉

化城喩品／以是因縁今説法華経

12 ○うつろひしかげも岩まの薄ごほりとけてまことのさゞ波ぞたつ

五百弟子品／以無価宝珠繫其衣裏

13 ○ゑひ醒て身の怠りをおもふにぞ又もころもにゆらぐ玉の緒

〔奥書〕合点十二首／何も面白別而将又／六かしき題御秀逸／珍重〳〵／宣阿（花押）

W 冬音和歌十首

〔端書〕享保二酉夷則景新加筆〔奥ニアリ〕

〔内題〕詠十首和歌／平井冬音上

初春霞

1 ○長閑さを空にまづしるあさみどり春立初てかすむ山の端

〈珍重〳〵〉

野若菜

2 ○色見えて手には摘れず昨日今日雪間に萌る野辺の若菜は

古宅梅

3 ○匂ひ来ていとゞ昔をしのぶ草あれぬる軒の梅の下風

〈よろしく候〉

水辺柳

4 打靡く風のみだれも池水にいろをあらそふ青柳の影

遠帰雁

5 とゞまらぬ名残だに有雁金の霞の余所に何いそぐ覧

○とゞまらぬ名残だに有雁金は霞の余所に何いそぐ覧

忍涙恋

6 洩さじと思ふ心に下ぶかき袖のなみだよ我と添行

○洩さじと思ふ心につゝみても袖のなみだよ我と添行

契待ー

7 ○偽を余所になしてぞ待れぬる暮ばと契る人の言葉に

〈よろしく候〉

逢後増ー

8 今迄の心くらべも逢見てぞ真清の鏡面影にたつ

依泪顕ー

9 ○いつしかと洩て立そふうき中をつゝむ涙の袖のあだ波

恨身ー

10 ○つれもなき人をしうらむ心こそ我玉の緒の乱れなりけれ

〈珍重〳〵〉

〔奥書〕ナシ